

〈資料紹介〉

「金沢家文書」のアイヌ語彙集

深澤美香

- 目次
1. はじめに
 2. 金沢家文書について
 - 2.1. 先行研究
 - 2.2. 「〔アイヌ語彙集（付・シマコライヤ）〕」（No.89）
 - 2.3. 『藻汐草』との関係
 - 2.3.1. 部門と語彙の対応関係
 - 2.3.2. 第一グループの語彙
 - 2.3.3. 第二グループの語彙
 - 2.3.4. 第三グループの語彙
 3. 方言的な特徴
 - 3.1. 「父」と「母」
 - 3.2. 「星」と「寒い」
 - 3.3. 語彙的な特徴をどう見るか
 4. 翻刻と語彙リスト
 - 4.1. 作業経緯
 - 4.2. 注意事項
 - 4.3. 金沢家文書（No.89）翻刻
 - 4.4. 金沢家文書（No.89）語彙リスト
 5. おわりに

参考文献

参考資料：金沢家文書「〔アイヌ語彙集（付・シマコライヤ）〕」（No.89）（1丁表～5丁裏）
キーワード：金沢家文書、藻汐草、近世アイヌ語、根室場所

1. はじめに

本稿は、岩手県宮古市の近世蝦夷地関係史料として知られている金沢家文書「〔アイヌ語彙集（付・シマコライヤ）〕」について、この前半部にあたるアイヌ語彙集の翻刻を試みたものである。本資料は、東（2012）「岩手県宮古市所在・金沢家文書の蝦夷地関係史料について」において「〔アイヌ語辞書・アイヌ語文書〕」（No.89）として紹介されているものと全く同じものを指す¹。

金沢家文書は、東(2012:87)によって「昭和50年度からはじまった宮古市史編さん事業により収集された資料群のひとつ」であり、「同編さん室が市内の古文書所蔵者から史料を活用し、目録を作成し、コピーをとって所蔵者に返却するという行為のなかで、同編さん室に収集されたもの」と紹介されている。総数259件のコピーが宮古市史編さん室に所蔵されているが、どこの誰から収集した文書なのかを記録する慣習がなかったようで、2008年の東氏の調査時点で原本の所在は確認できなくなっていたそうである。

2014年の夏に、筆者が宮古市史編さん室の假屋氏へ問い合わせたところ、2008年の東氏の調査後、原本を所有しているであろう持ち主らしき人が特定できたのだとおうかがいした。しかし、2011年の東日本大震災の津波でその地域は壊滅的な被害を受け、確認に行ったときには家もろとも跡形もなくなっていたそうである。よって、今後原本が見つかることは絶望的としか言いようがない。現時点では、宮古市史編さん室にある紙焼きコピーが、原本から直接コピーした資料として最良のものと言える。

原本を確認していない状態でありながら、筆者が今回資料紹介に踏み切った理由は、2011年の大震災によって原本が出てくる見込みが殆ど無くなってしまったということがまずひとつにある。そして、もうひとつは、金沢家が根室場所と関係を持ち、根室場所に関連する文書類と共に残されたアイヌ語語彙集であったという点にある。アイヌ語は文字・音声ともに採録地域が限られており、根室地方のアイヌ語に至っては文字資料でしか確認できないという状況下にある。しかも、その大半は19世紀の別海周辺地域(根室国、現在の根室振興局管内)の資料である加賀家文書の解読と研究に委ねられていると言っても過言ではない。万が一、この金沢家文書の語彙集が現地根室で書きとったアイヌ語を採録していたとするならば、これは根室地方のアイヌ語に関する貴重な参考資料となるわけで、やはり一見の価値があると筆者は考える。

利用の便を図り、それぞれの語彙についてローマ字化、品詞・形態素分析、および現代語訳を施し、アイヌ語カタカナ引きの語彙リストを作成した。また、本稿の最後には、筆者の手元にあるコピー資料をスキャンして電子化したものを参考資料として掲載する。これは、東氏の手許にある紙焼きコピーの複製をさらにコピーして頂いたもので、原本からすると3度目の紙焼きコピーの画像である。本来であれば、宮古市史編さん室にあるコピーの画像を掲載すべきところであるが、岩手県宮古市まで足を運ぶことをしなかったのは、筆者の怠慢としか言いようがない。あくまでも「参考」としてご覧頂ければ幸いである。

2. 金沢家文書について

2.1. 先行研究

「金沢家文書」に関する先行研究は、『宮古市史 資料目録(1)』(2006)と東(2012)の2件が知

¹ 本稿で資料名を変更した理由・目的は、第一に、本資料は語彙数が少なく、意味・用法に関する詳述があるわけでもないため、「辞書」よりは「語彙集」のほうが妥当と考えられること。第二に、他のアイヌ語語彙集の名称と差異化を図るためである。資料番号は『宮古市史 資料目録(1)』(2006)に掲載されている「金沢家文書」内の整理番号をそのまま使用している。

られており、それら以外では筆者も未だ確認できていない。初めに『宮古市史 資料目録(1)』から見て行くことにするが、その「凡例」には次のような説明がある。

昭和50年度に宮古市史編さん事業がはじまって以来、多くの方々のご協力により古文書が編さん室に提供された。貸出を受けた資料は目録を作成し、コピーをとって所有者に返却してきた。この目録は、こうした資料収集の成果を家別にまとめたものである。

(『宮古市史 資料目録(1)』p.1)

この『宮古市史 資料目録(1)』には、五十音順で家々の文書に関する解題が記され、その後、やはり「家」ごとに資料目録が掲載されている。金沢家文書に関する解題は、次のとおりである。

19 金浜 金沢家文書

金浜は閉伊川と津軽石川の間位置する漁村地区である。金沢家は幕末期に肝入を務めた家であり、代官所とのやりとりを記録した書留帳、検地や役銭関係など貴重な記録が多く保存されていた。また、蝦夷地警備の資料と弘化・嘉永の百姓一揆関係の資料がまとまっているのが特徴である。

行政関係では、資料No.3・4は安政3年(1856)の地震により延期となった藩主巡見である。No.10は南部家諸士の由緒の要約と「南部拾万石軍役定」、各郡の村数と石高が記されている。…【中略】…資料No.86から116までの蝦夷地警備関係は、原住民に対する通達のアイヌ語訳など興味深いものも含まれている。資料No.121から138までは三閉伊一揆関係のもので、嘉永6年(1853)のものが多く、どれも記述が詳細で概要をつかむことができる。

(『宮古市史 資料目録(1)』p.7-8)

資料目録によれば、「金沢家文書」とされる資料は259件(No.1-259)であり、「蝦夷地」に分類されているNo.86から116までの31件を見ると、年代がはっきりしているものでは、早くて文化14(1817)年7月、遅いもので嘉永6(1853)年12月29日とある。差出人(作者)や受取人(宛名)には、「子モロ」や「クン子ヘツ」、「シヘツ」などという道東の地名が見られ、金沢久蔵という人物の名が31件中9件に見つかる。金沢家文書259件中で彼の名が記されているものを調べると、1832年²から1869年までの期間であり、真実の程はわからないが、子モロ番人という役職名を冠しているものもある。番人でアイヌ語に精通していた人といえばモンベツ場所の能登屋円吉が有名だが、金沢久蔵も職務上、必要にかられてアイヌ語を学んだ人という可能性がある。

東(2012)は、『北海道・東北史研究』で組まれた特集「災害史と被災地史料」のなかで、金沢家文書の蝦夷地関係史料を紹介している。それによると、「2008年5月9日に宮古市立図書館(岩手県宮古市)を訪れた際、同館二階の宮古市史編さん室において、金沢家文書と題された紙焼きコピー製本を見せて

² 1735年というのが1832年より前にとんで一件存在するが、1832年以降の資料がまとまっており、ひとまず除外しておくことにする。今後、実際に資料を見て照合する必要がある。

いただき、近世蝦夷地関係史料が含まれていることを確認した」(p.87)とあり、「筆者の手元には、同編さん室所蔵の紙焼きコピー製本からコピーさせていただいたNo.86～116の31件の紙焼きコピーがある」(p.87)とも述べられている。また、金沢家文書の重要性について次のような見解を示している。

金沢家文書における蝦夷地関係史料の所在理由は、金沢三右衛門、金沢久蔵といった金沢家関係者の蝦夷地警備派遣、もしくは子モロ場所における勤務実態による、宮古金沢家への関係史料の伝来・伝存にあると考えられる。また、アイヌ語文書等の包含は、金沢家関係者が場所請負制下の「場所」における指導・監督的な役割を果たす職に就いていた可能性を示している。

宮古は、青森県下北半島の北辺、秋田県南海岸部等と並んで、江戸時代後期に蝦夷地へ「稼方」(出稼ぎ人)、あるいは「場所」の「番人」を多く輩出した地域である。しかも、子モロ場所については、幕末期の例で、出稼ぎ漁業労働者総数の半数以上が宮古を中心とした田老から墓目に至る宮古通りの村々であったとの指摘がある³。しかしながら、従来は宮古所在の蝦夷地関係史料の存否不明瞭により、具体的な事実の検証が困難であった。今回の金沢家文書における蝦夷地関係史料により、東北地方からの和人出稼ぎや、子モロ場所の研究といった領域の学問的漸進が期待できる。

(東 2012: 85)

さらに、東(2012)には、コピーと『宮古市史 資料目録(1)』を照合して加除修正を行った資料目録、および「近世アイヌ社会の解明の一助になるとと思われる4点の史料」の翻刻が掲載されている。以下は、東氏が翻刻した4点と筆者が翻刻するNo.89について、東(2012: 86)の目録より抜粋したものである。

No.	名 称	年号月日	西暦	差出人 (作者名)	受取人 (宛名)	備考
87	年中蝦夷人勘定調差引残り金預り扣	天保3月11日	1832	クン子ヘツ番屋		綴
88	エトロフ御場所〔エトロフ場所ヲムシヤ申渡〕 ⁴	天保3年1月	1832			綴
89	〔アイヌ語辞書・アイヌ語文書〕					綴
90	〔廻嶋ニ付申渡(日本語・アイヌ語併記)〕					綴
91	売買目録(蝦夷人江弘諸品直段・買上直段)	天保9年1月	1838	一 ○出持処		綴

ここまで見てきたものが、金沢家文書に関する先行研究である。金沢家の金沢三右衛門や金沢久蔵らについても不明な点が多く、今後文書全体を把握しようとする詳細な研究が進むことが望まれ

³ 榎森進「海峡をはさむ地域史像：ひと・もの・情報」(北海道・東北史研究会編『北からの日本史第2集』三省堂、1990)。

⁴ No.88の「エトロフ御場所〔エトロフ場所ヲムシヤ申渡〕」は、根室(子モロ)場所での勤務実績もある加賀伝蔵が書き残した加賀家文書(資料番号31, 32)にも見つかった。

る。こうしたなかでの本稿の位置づけは、未公開資料であった金沢家文書No.89の翻刻を試み、金沢家文書のアイヌ語資料を初めて言語学的な立場から紹介するものである。

2.2. 「[アイヌ語彙集(付・シマコライヤ)]」(No.89)

本稿で取り上げるのは、東(2012)で翻刻がなされなかったNo.89のアイヌ語彙集である。コピーの1枚目を確認すると、表紙は無く、紙縫りで綴じた仮綴じの形態がとられているようである。紙縫りで結ばれていない側の破損が目立つが、表と裏の破損の仕方が同じところを見ると欠けている丁は無さそうに見える。序文や跋文、奥書もないため編著者や成立年等の詳細も不明である。金沢家文書の蝦夷地関係資料で年代が特定できるものは1817年から1853年までの間であり、「エトロフ御場所〔エトロフ場所ヲムシヤ申渡〕」(No.88)というアイヌ語資料の成立年为天保3年1月(1832年)であることも考慮すれば、概ね19世紀の初めから中頃であろうか。

丁数は全8丁で、語彙集部分(5丁)とテキスト部分(3丁)の2部構成となっている。語彙集はシンプルかつコンパクトなものであり、和語見出しにアイヌ語の対訳があるだけで、説明はない。アイヌ語が読み取れる和語見出しの数は269である。構成や内容は、上原熊次郎の『藻汐草』に類似するところがある(これについては、2.3節で詳しく見て行くことにする)。

テキストは、執筆者がアイヌ語で作文をしたものであるという可能性があり、導入部に「タンエタク ヌカラ シュウンケイタク タバナ」(和訳はついていないが「この言葉を見て、空言を申します」という意味であろう)という一文が見受けられる。冒頭には「シマコ(ク)ライヤ」というタイトルがついており、和訳は併記されずアイヌ語のみで文章が書かれている。

本稿では、後半のテキストを読み解く準備段階として、前半にあたる語彙集部分のみを翻刻の対象とした。テキスト部分については、今後の研究で明らかにしていきたいと考えている。

2.3. 『藻汐草』との関係

2.3.1. 部門と語彙の対応関係

金沢家文書のアイヌ語彙集(No.89)は、『藻汐草』の類本と言うべき資料でもある。上原熊次郎が著した『藻汐草』は、1792年に板行された和語・アイヌ語辞典である。後世のアイヌ語の辞書・語彙集に大きな影響を与えたと見られ、その写本・類本が様々な形で残っている。この金沢家文書のアイヌ語彙集が『藻汐草』と直接もしくは間接的に関係を持っているというのは、和語見出しの選定や部門の立て方を見ても明らかである⁵。具体的に言うと、金沢家文書の語彙集に関しては、

⁵ 本田(2013)では、秋田県にかほ市象潟に伝存する『蝦夷方言藻汐草』(「象潟藻汐草」)について上原熊次郎の『藻汐草』との比較からその特徴が論じられており、本稿もそれに倣ってジャンルの対応に目を向けた。しかし、「象潟藻汐草」のように明らかな「写本」であれば、ジャンル自体やその内部における並べ替え、語彙数の違いというのが重要になってくるかもしれないが、金沢家文書は「類本」という資格が持てる程度のものである。部門名に「衣食之部」や「気形之部」がある時点で、『藻汐草』の「類本」相当のものから写したという可能性も疑われる(例えば、松浦武四郎の『蝦夷語』には「衣食」と「気形」の部門が確認できる)。よって、今後「類本」同士の比較も必要になってくるものと考えられ、本稿は、どのジャンルと語彙が『藻汐草』と対応しているかということにひとまず重点を置いて調査することにした。

- ①天地之部 (1丁表)
- ②人倫之部 (1丁裏)
- ③支躰之部 (2丁表)
- ④衣食之部 (2丁表-2丁裏)
- ⑤気形之部 (3丁表)

という5部門が確認できる。これに対し、上原熊次郎著の『藻汐草』は、

- ①天地部／②人物部／③支體部／
- ④世事部／⑤口鼻耳目心／⑥器材部／
- ⑦鳥獸部／⑧草木部／⑨品目／
- ⑩助辞／⑪熟語

という11部門に及ぶが、部門名や見出しのまとまりには、概ね以下のような対応関係が見られる。

(金沢家文書：藻汐草)

- ・天地之部：天地部
- ・人倫之部：人物部
- ・支躰之部：支體部
- ・衣食之部：草木部
- ・気形之部：鳥獸部

金沢家文書アイヌ語語彙集の3丁裏からは部門名がついておらず、約66%⁶が『藻汐草』に対応しない語彙である。そのうち対応関係の見られる和語見出しやアイヌ語の語彙は「世事部」や「口鼻耳目心」が中心であり、稀に「器材之部」や「助辞」と対応関係が見られることもある。

ここでは語彙の対応関係を比較するにあたり、概ね三つのグループでとらえておくことにする。

第一グループ：和語見出しが一致する

- A. 和語見出し (一致)・アイヌ語 (一致)
- B. 和語見出し (一致)・アイヌ語 (推定形⁷が一致)
- C. 和語見出し (一致)・アイヌ語 ((推定形が)部分的に一致)

第二グループ：和語見出しが相似・類似する

- A. 和語見出し (相似)・アイヌ語 (一致)
- B. 和語見出し (相似)・アイヌ語 (推定形が一致)
- C. 和語見出し (相似)・アイヌ語 ((推定形が)部分的に一致)

⁶ 和語見出しとアイヌ語に破損等が見られない3丁裏からの156例中、103例が『藻汐草』に記載の無いアイヌ語であった。以下で述べる第三グループの語彙に相当する。

⁷ 「推定形」とは、カタカナ表記から推定できるアイヌ語の語形のことをさす。

第三グループ：アイヌ語がオリジナルである

- A. 和語見出し（一致・相似）・アイヌ語（オリジナル）
- B. 和語見出し（対応関係無し）・アイヌ語（オリジナル）

大雑把な見方ではあるが、「写本」と称されるものはおおよそ第一グループで構成されている。これに対して、もし第三グループが多ければ、よりオリジナリティの高い語彙集ということになる。第二グループはその中間にあたるもので、和語見出しをより適切なものへ変えようとする向きがあったか、あるいは全く新しい見出しとして立てたものかは不明だが、この類のものが増えるに従って「写本」というよりも「類本」と言うに相応しくなってくるということは言えるだろう。これら三つのグループは連続体をなすものであるから厳密に分類するとなると難しいが、上記5部門中『藻汐草』と対応関係をもつ全145対⁸をもとに一応の整理を試みることにする。

2.3.2. 第一グループの語彙

第一グループは、「和語見出しが一致し、アイヌ語も対応する」という特徴をもつグループである。『藻汐草』と対応関係をもつ5部門中においては、このグループに属するものが145対中66対で約45.5%を占める。

	(藻汐草)		(金沢家文書No.89)
1-A：雲	ニシ	〃	〃
川	ベツ	〃	〃
先祖	セリマカ	〃	〃
右手	シモンテキ	〃	〃
獺	イシヤマニ	〃	〃
1-B：風	レイラ	〃	レラ
妹	ツレン	〃	トレシ
鹿	ユーク	〃	ユク
蜂	シヨーヤ	〃	ソヤ
海月	フンベイトリ	〃	フンベエトロ
1-C：地	シリカ	〃	シリカタ
月	クン子チュツプ	〃	チュフ
月	アンチカラチュツフ	〃	チュフ
寒	メイ	〃	メノエ
寒	メイ	〃	メアン
雲	ニシ	〃	ニシヨロ
伯母	コンナリペ	〃	ウナルヘ

それぞれの割合は、1-A: 20対（約13.8%）、1-B: 26対（約17.9%）、1-C: 20対（約13.8%）である。1-Aは見出しとアイヌ語がともに一致するもので、1-Aが多いほど写本である可能性は高ま

⁸ 『藻汐草』と和語見出しが一致していても、金沢家文書に記載のないアイヌ語の語彙（5部門中22対）は対象としなかった。

る。1-Bは一見すると「写した」ようには見えないかもしれないが、これは書き手自らのカタカナ表記法でアイヌ語を文字化したものであり、書き手が意図するアイヌ語（推定形）は同じものであると考えられる。よって、1-Bは書き手のアイヌ語カタカナ表記の特徴を知る上で利便性の高いものとされ、加賀家文書『藻汐草 [写]』でも表記の傾向をつかむ手掛かりとなっている（田中・佐々木 1985; 深澤2014a）。金沢家文書の語彙集に目立った特徴としては以下の通りである。

「上原熊次郎『藻汐草』の表記」→「金沢家文書No.89の表記」

①長音表記を省く

- rera 「風」: 「レイラ」→「レラ」
- urar 「霧」: 「ウーラリ」→「ウラリ」
- yup, -i 「(～の) 兄」: 「ユービ」→「ユビ」
- sa(, -ha) 「(～の) 妹」: 「シヤー」→「シヤ」
- yuk 「鹿」: 「ユーク」→「ユク」
- wosekamuy 「狼」: 「ラーセカモイ」→「ホセカムイ」
- soya 「蜂」: 「シヨーヤ」→「ソヤ」

②/tu/ の表記は「ツ」→「ト」へ変更

- atuy 「海」: 「アツイ」→「アトエ」
- tures, -i 「(～の) 妹」: 「ヅレシ」→「トレシ」
- kewsut, -u 「(～の) おじ」: 「ケウシユツ」→「ケウシト」

③半濁点を使用しない

- apto 「雨」: 「アプト」→「アフト」
- sikiwtacup 「四月」: 「シキウタチユツプ」→「シケウタチユフ」
- kamuycikap 「梟」: 「カモイチカプ」→「カムイチカフ」

このほか、原則的ではないが傾向として2点あげる。

④濁点をとることがある（「濁点なし」→「濁点あり」は稀）

- ruanpe 「雨」: 「ルアンベ」→「ルアンヘ」
- retarcir/ tetarcir 「白鳥」: 「デタチリ」→「テタチリ」

⑤「イ」→「エ」になることがある（「エ」→「イ」は無い）

- humpeetor 「海月」: 「フンベイトリ」→「フンベエトロ」
- poyna 「石」: 「ポイナ」→「ホエナ」

1-Cは、見出しが一致し、アイヌ語が部分的に一致を見せるものである。アイヌ語の表現形式を文法的もしくは語彙的に補完・修正しようとする力が働いた時に見られる特徴であると考えられる。例えば、「地」は、「～に」を表す格助詞 ta を加えた形式に変更されている。「月」は、kunnecup

(夜の月)からkunne(暗い、夜)をとった形式、「雲」はnis(雲)にor(o)(～のところ)という位置名詞が加わった形式と考えられる。

2.3.3. 第二グループの語彙

第二グループの特徴は、何と言っても和語見出しにある。アイヌ語の差は、第一グループのAからCにそのまま対応しており、第一グループの亜種と言っても良いかもしれない。見出しの意味は然程変わらないことも多く、アイヌ語による指示対象が同じであれば、あとは訳語や表記の問題とも言える。ここでは和語見出しが完全一致するものを第一グループに含め、それ以外は第二グループにまわしている⁹。このグループに相当するものは、145対中36対で約24.8%を占める。内訳は、2-A: 9対(約6.2%)、2-B: 19対(約13.1%)、2-C: 8対(約5.5%)。

	(藻汐草)		(金沢家文書No.89)
2-A: 沢	ナイ	谷	〃
丘陵	ヤベカ	岡	〃
處	コタン	村	〃
たも	ビンニ	タモ木	〃
長芋	チウリフ	蕷	〃
2-B: 石(小なるハ)	ヒニケウ	ヂヤリ	ビニケウ
醒	マウシク	叱	マウサク
甘い	ルラコル	美味	ルリコル
小鴨	コベツチャ	マ鴨	コヘチャ
龍神	レフンカモイ	鯨	レフンカムイ
2-C: 西	シユム	西	ヲシユム
甘い	ルラ	美味	ルリコル
甘い	ルラビリカ	美味	ルリコル
粟	ムジロ	餅粟	ムンチロアマ、
茸	カルシ	舞茸	ユウカルシ
茸	カルシ	木茸	ウコニカルシ

2.3.4. 第三グループの語彙

第三グループの特徴は、アイヌ語の語彙に見られる独自性である。見出し語は『藻汐草』を参照している(のかもしれない)が、対応するアイヌ語が異なっている場合(3-A)や、見出し語自体に新規性が見られる場合(3-B)がある。このグループに属する語彙はフィールドから得られた語彙である可能性があり、従って、方言的な特徴が見込まれることもある。3-Bを見ると、「雪」な

⁹ 実際、どこからどこまでを第二グループとするかは判断が難しいことがある。例えば、3丁裏以降に見られる和語見出しの送り仮名の有無や、ひらがなとカタカナの違い程度であれば、第一グループに入れることも十分に考えられる。

どという基礎語彙が増やされ、「聳」(むこ)があるにも関わらず「嫁」が採録されていないという『藻汐草』のいわば手落ち部分も補完されている。このグループに属するものは145対中43対で、約29.7%を占める。3-Aは15対(約10.3%)、3-Bは28対(19.3%)である。

(藻汐草)		(金沢家文書No.89)	
3-A: 天	—	〃	カントウ
日	—	〃	シユクシ
津波山	ミ	津波	ブルブルケ
午	—	南	エレバシ
母	—	〃	ヲン子キ
祖母	—	〃	フチ
姉妹の聳	—	聳	コ、
徒弟	—	〃	ウカルカ
眩暈	—	めまゑ	シユ
白鳥	—	白鳥	ヘケレチカフ
3-B: —	—	雪	ウバシ
—	—	穴	ブエ
—	—	涼	メマンカ
—	—	嫁	コシマチ
—	—	孝	ウヌ、カ
—	—	腹痛	トエチヌエバ
—	—	季	モマ
—	—	菖蒲	シルコクシリ
—	—	孔雀	ケシヨラツフ
—	—	大魚	ソヨマシケ

3. 方言的な特徴

3.1. 「父」と「母」

筆者がこの語彙集で最初に注目したのは、「父」と「母」という親族名称である。「父」と「母」はアイヌ語のなかでも方言差が目立つ語彙であり、筆者もかつて言語地理学的な研究の対象として調査したことがある (Fukazawa 2012)。興味深い点というのは、onneke「母親」というこれまであまり報告のない語形が金沢家文書の語彙集に確認できるということである。

onneke という語形について筆者が現時点で確認できているのは澤井 (2001, 2006) と知里 (1975) のみであり、分量も多くないので簡条書きにして引用する¹⁰ (隅付き括弧【 】内は引用者による註である)。

¹⁰ 澤井 (2006) の記述は、澤井 (2001) に重なるので割愛した。

1. 本別方言では他方言にみられる unú も tóttó も用いられない。ただし、onneke オンネケという従来知られなかった語が存在する。

(澤井2001: 31)

2. 「私のお母さん」という言い方について【沢井氏に】¹¹ 質問した時は次のように答えている。e=onnekehe エオンネケへ【e= お前の、onnekehe 母(所属形)】とか e=hapoho エハポホ【e= お前の、hapoho 母(所属形)】とか。ku=hapo クハポ【ku= 私の、hapo 母(所属形)】も ku=onneke クオンネケ【ku= 私の、onneke 母(所属形)】も同じだ。

(澤井 2001: 32)

3. この語【onneke(he)】は呼びかけには使わない。また、小さい子どもには難しすぎるので15, 16才辺りから上の年代に向けて用いられるということである。

(澤井2001: 33)

4. 帯広の上野さん¹²はこの語について「親のこと」という。人が「サダ・オンネケ」といえば「私(サダ)の親」だという。…【中略】…上野さんは当時母親と暮らしていたので、「母さんでも onneke っていうんでしょう」と言っていた。また、e=onnekehe エオンネケへ【e= お前の、onnekehe 母(所属形)】も e=kor onneke エコロ オンネケ【e= お前が、kor 持つ、onneke 母】も同じだという。

(澤井 2001: 33)

5. 本別方言では、人称接辞と所属形(ku=onnekehe)【ku= 私の、onnekehe 母(所属形)】を用いており、沢井氏は kor onneke【kor 持つ、onneke 母】を「聞きにくい」と言い、後者は用いない。本別方言と帯広方言ではこの語に意味の違いがあり、所有の関係を表す形についても差異がみられる。

(澤井 2001: 33)

6. onne-ike [ón-ne-i-ke オンネイケ]《チカブミ》親。[onne(親である)+ike(者)]。

“toampe〜”「あの人の親」。“〜-utar”「親たち」。

(知里 1975 [1954]: 492)

1～6をまとめると、

- onneke (または onneike) という語形は、旭川(近文)、帯広、十勝(本別)で記録される。

¹¹ 沢井トメノ氏：1904年生まれ、十勝(本別)方言話者。

¹² 上野サダ氏：1921年生まれ、帯広方言話者。

- ・旭川と帯広は「母親」ではなく「親」という意味で用いられる。
- ・十勝方言話者である沢井氏によれば、onnekeは呼びかけに用いない。

ということが先行研究によって知られていることである。

このonnekeであるが、「はじめに」で触れた加賀家文書にも見つかっている。加賀家文書は、19世紀に別海周辺地域で蝦夷通辞（アイヌ語と日本語の通訳）をしていた加賀伝蔵が大部分を執筆した資料である。この加賀家文書の中にも『藻汐草』の写本があり、一冊のなかで上と下に分かれているのだが、上は原則第一グループの語彙で構成される『藻汐草』の写しであり、下は『藻汐草』の天地部と人物部、支體死活¹³の和語見出しに選り抜きのアイヌ語対訳（原則、第一グループ・第三グループの語彙）と語源解がついているところが特色で、オリジナル性が高いことから「類本」相当と言えるだろう。

ここでは、加賀家本の上を②「藻汐草 [写]」、下を③「〔蝦夷語和解〕」と呼び、これら二点に①上原熊次郎の『藻汐草』と④金沢家文書アイヌ語語彙集（金沢家類本）を加えて、「父」と「母」の語彙について比較を試みる（波線部は字消しを意味し、ローマ字転写は深澤による）。

①上原熊次郎『藻汐草』

父 ハンベ▲ミチ▲アチャ(hampe/mici/aca)
母 ハボ (hapo)

②加賀家文書「藻汐草 [写]」

父 ハンベ○ミチ○アチャ(hampe/mici/aca)
母 ハボ (hapo)

③加賀家文書「〔蝦夷語和解〕」

父 ミチ (mici)
アツチャ (aca)
母 ハボ (hapo)
父親 アチャ (aca)
母親 ヲン子ケ (onneke)

④金沢家文書(No.89) 語彙集

父 ミチ (mici)
アチャ (aca)
母 ヲン子キ (onneke)
ハボ (hapo)

¹³ 深澤（2014b）の説明では、支體死活の部門を欠いてしまっていたが、実際は、天地部、人物部、支體死活の合わせて3部門で構成されている。不正確な記述であったことをお詫びし、訂正する。

アイヌ語の収録語彙を見ると、①②対③④という構図になっているのがわかる。①②に比較すると、③④では、「母」や「母親」の見出しに onneke という語彙が記載され、「父」や「父親」の見出しには hampe という語彙が記載されていない。加賀家本に限って言えば、一冊のなかで上下（②と③）の収録語彙が異なっていることになる。

筆者が Fukazawa (2012) のなかで論じたのは、加賀家文書の資料的な特徴（一冊の上下で収録語彙が異なり、下は独自の語源解が記載される等）によって、②「藻汐草 [写]」からより実用的な形に編集されたものが③「[蝦夷語和解]」であると仮定し、③には現地の言葉を収録しようとする力が働いた可能性があるということを示した。言い換えると、onneke は実用に即した語（恐らくは別海周辺地域の言葉）であり、一方 hampe は記す必要のなかった語（例えば、他地域の方言形であるとか、日常では殆ど使用しないような言い方であった等）なのではないかというのが筆者の主張である。この説の補強としては、onneke が帯広や十勝（本別）など北海道の東部方言に顕著な報告があり、hampe は北海道の中央部に位置する旭川と名寄¹⁴以外では報告されていないということがある。

そして今回、根室場所などに関係をもつ金沢家が残した語彙集④も onneke という語彙を収録しているということが判明した。③④において第三グループ相当の語形が一致するというのは、二つの資料が非常に近い地域の言葉を反映しているという地域的（方言的）関係か、一方が他方を写したというような資料的関係が見込まれる。後者である場合は、第二グループに特徴的な和語見出しが一致することや、第三グループのなかでもオリジナルの見出しである 3-B が一致することが期待される。そうでなければ、むしろ地域的な類似性を反映しているというほうが考えやすい。今後さらに調査していく必要はあるが、③と④は地域的な関係にあって、onneke はその地域的な類似が見込まれる最たる例ではないかと考えている。

また補足的なことではあるが、この onneke という特殊な語彙について、Fukazawa (2012) では、「親」という意味が onne-(i)ke 「年老いた・ほう」という語構成に由来するならば、父や母の区別とは関係なしに「親」という意味で使っていたのが初めだったのではないかとすることも述べた。意味というのは歴史とともに変化する。筆者は、これを意味の特殊化（上位概念から下位概念への変化）であると考え、「親」から「母親」という意味に特化したのが十勝方言、そして加賀家文書「[蝦夷語和解]」に所収された語なのではないかと推測した。もちろん、これは逆の推測（「母親」が「親」という意味へ拡張した）も論理上ありうるわけで、積極的に否定すべき根拠もない。しかし、語構成上の解釈（「年老いたほう」¹⁵）を判断材料と見た場合に、前者の推測が支持できるのではないかとというのが現段階における筆者の考えである。

3.2. 「星」と「寒い」

金沢家文書に特徴的な語彙は他にもある。例えば「星」の見出しに「リコフ」とあるが、これは服部・知里（1960）や服部（編）（1964）で美幌方言として記載される rikop に相当するものと考

¹⁴ 例えば、服部・知里（1960）、服部（編）（1964）。

¹⁵ 「年老いたほう」が何故「親」になるのかと疑問を抱かれるかもしれないが、語弊を承知の上で補足すると、Jr.（ジュニア）と逆の考え方だと思えば幾分わかりやすいかもしれない。Jr. は父親を基準にした言い方であるが、onneke の場合は子どもを基準にして（認知言語学的に言えば「参照点」として）、親を「年老いたほう」とみることになる。

えられる¹⁶。北海道における大多数の方言では *nociw* が使われ、宗谷では *keta* という語形が用いられる。また、樺太の多くの方言では *keta*、北千島も *keta* である。樺太の一部地域（内路や、老人語としてライチシカ）では *noociw* という語形も見出されるが、中川（1996: 10-11）は言語地理学の考え方から「*noociw* の方がむしろ残存形であり、樺太で *noociw* → *keta* という変化が起こったという解釈が成り立つ」と論じている。

この歴史的な解釈について筆者は未だ検討中であるが、*nociw* と *keta* が広域に見出される語形である一方、*rikop* という語形は非常に限られた地域で用いられているということは間違いない。その上、*rikop* は *rik-o-p* 「上方に・ある・もの」と分析的な解釈に立ち戻りやすい語形をしており、比較的新しく出て来た語形であると捉えられるのではないかと考えている¹⁷。

「星」に方言差があるということは、『藻汐草』にも記録されている。

①上原熊次郎『藻汐草』

星 ノチウ▲リコツプ▲ケダ(*nociw/rikop/keta*)

②加賀家文書「藻汐草 [写]」

星 ノチウ リコツフ ケタ(*nociw/rikop/keta*)

③加賀家文書「〔蝦夷語和解〕」

星 ノチウ (*nociw*)

④金沢家文書(No.89) 語彙集

星 リコフ (*rikop*)

問題は、③の「〔蝦夷語和解〕」が金沢家文書と違う語形を取り上げていることであるが、釧路では *nocuy* という記録が見られる（服部・知里 1960）ので、美幌と釧路に隣接する根室や別海などでは、*rikop* と *nociw* の2つの語形が共存していた可能性もある。むしろ、金沢家文書が北海道の大多数の方言で用いる *nociw* ではなく *rikop* のみを提示していることは興味深く、資料の方言的な特徴として気に留めておくべきかもしれない。

もうひとつ、「寒」という見出しについても考えてみたい。

①上原熊次郎『藻汐草』

寒 メイ (*me*)

¹⁶ 『北海道あいぬ方言語彙集成』(p. 116) には *rikop* が釧路市春採の語彙としても記載されているが、実際に吉田巖の日記や資料で確認できていないことから、釧路にあるかどうかは一旦保留にしておくことにする。

¹⁷ このほか、最古のアイヌ語語彙集として知られている「松前ノ言」に「里いこ」と見えるが、方言分布から見ると、*rikop* が *nociw* や *keta* より古いとは今のところ言い難い。

②加賀家文書「藻汐草 [写]」

寒 メイ (me)

③加賀家文書「〔蝦夷語和解〕」

寒 メウン (meun)

④金沢家文書(No.89) 語彙集

寒 メノエ メアン (menoye/mean)

現代のアイヌ語辞典(中川 1995: 377; 田村 1996: 383)で確認すると、アイヌ語で「寒い」ということを表す時には、「気温が寒い」という 0 項動詞と「(人が) 寒いと感じる」という 1 項動詞の二形式で表現されるようだということがわかる。また、①や②で取り上げられている me というのは、田村(1996: 383)によれば「寒さ」を表す語根であって「独立の名詞としては使われない」ことが報告されている¹⁸。例えば「気温が寒い」という意味の mean は「mean < me-an 寒さが・ある」という語構成になっており、北海道や樺太で広く使われる語形(服部(編)1964: 225)である。

一方、後者の「(人が) 寒いと感じる」という語形には方言差が認められ、服部(編)(1964: 225)によると、meun は八雲と帯広で、menoye は美幌で使用されるが、そのほかの北海道各地(八雲、幌別、沙流、旭川、名寄)では merayke、樺太のライチシカでは meerayki という語形が確認できる。筆者が調べたところ、meun は旭川でも見つかっており、「気温が寒い」という 0 項動詞¹⁹としても用いられるようであった(『アイヌ民俗文化財調査報告書』1: 93)。mean と meun は音も非常に似通っていることから、方言によっては混乱が生じたのかもしれない。

③と④でやはり収録語彙は違うものの、④が「星」と同様、美幌で報告されているものと同形の語彙が取り上げられていることが重要なことで、方言的な特徴が反映されている可能性は考慮に入れるべきであろう。

3. 3. 語彙的な特徴をどう見るか

ここまで、金沢家文書に含まれる語彙について方言的な側面を見てきたが、まだ紹介しきれていない特徴的な語彙も数多くある。「南」を「エレバシ」(erepasi)としていることもその一つで、e-rep-asi(頭・沖・～に～を立てる)が「沖のほうへ」という意味だとすれば、南側に海がある地域、つまりは太平洋沿岸地域でなければこのような言い方はしないはずだろうという推測がたつ。

¹⁸ me が自立的か否かという点については、本稿を査読していただいたモニターの方から、現代のアイヌ語の特徴をそのまま古い文献に適用してしまっているということにならないかというご指摘を頂いた。そのため、ここで現代のアイヌ語辞典の記述を引用しているのは、便宜上、方言形式を語構成の面から説明するためにすぎず、「語根をとりあげている『藻汐草』の記述はおかしい」ということを主張するものではないということを確認しておきたい。『藻汐草』を素直に読むとすれば、それが成立した当時は me が自立的な形式としてふるまっていた可能性も否定できないし、同じように当時は、meun, mean, menoye が me を抱合した一形式、あるいは独立の二形式であったかもしれない。実際どうだったかというのが分からない以上、様々な可能性は常に残しておかなければならないと筆者も考えている。

¹⁹ 0 項動詞の例文としては次のとおり：sironuma anak méun um an a 晩は、寒いなあ。(『アイヌ民俗文化財調査報告書』1: 93)。

本稿の4.4節に補足的な情報を手短に載せているので、一つ一つの語彙についてはそちらを参照して頂きたい。

なお、本稿では紙幅の関係で詳しく紹介できないが、筆者がこの金沢家文書No.89の翻刻と解読に取り組んでいた際、統計数理研究所の小野洋平氏と共同で研究をする機会が得られた。具体的には、この金沢家文書の語彙集の前半部(「天地之部」と「人倫之部」)から服部(編)(1964)の『アイヌ語方言辞典』に記載される語彙を49項目抜き出し、その他の様々な語彙集や資料から方言や語彙を補填した上で、どの方言に最も近いかということを経験分析にかけてもらった。対象とした方言は、八雲、幌別、沙流、帯広、釧路、美幌、旭川、名寄、宗谷、千歳、静内、十勝(本別)、樺太(ライチシカ)、北千島の14方言で、上原熊次郎の『藻汐草』と金沢家文書の語彙集の2つの資料がどの方言と近似性を持つかを調べた。

現段階ではまだ確定的なことは言えないが、上原熊次郎の『藻汐草』と金沢家文書の語彙集は、釧路・美幌・宗谷と同じクラスターに入る(近似の関係をもつ)傾向が強い。数値化のパターンによっては、上原熊次郎の『藻汐草』よりも金沢家文書のほうが釧路や美幌の方言に近いという結果もでてくる。

筆者が「根室方言」と便宜上呼び分けている加賀家文書には「美幌方言の片鱗がうかがえる」と指摘されてきた(浅井 1972)。金沢家文書にも美幌方言に近いという傾向が出ていることは特筆すべきであろうが、どうやら元々の『藻汐草』が道東方言に類似の性格をもつことに牽引されているらしいこともわかってきており²⁰、本資料の方言的な特徴については今なお検討課題である。また、この統計的な結果が支持できるかどうかについてはデータの扱いや値についても検討して頂かなければならないので、機会を改めて発表できればと考えている。

4. 翻刻と語彙リスト

4.1. 作業経緯

翻刻に入る前に、金沢家文書の翻刻作業に関する経緯についてごく簡単に説明しておく。筆者は、先行研究の東(2012)を読んで金沢家文書の存在を知り、その後、アイヌ語が記された資料についてコピー(原本からすると3度目の紙焼きコピー)を東氏に送って頂いた。東(2012)で翻刻されているものはNo.87, 88, 90, 91の4件、筆者が頂いたコピーはNo.88, 89, 90の3件であった。従って、手許にある資料のうち、No.89のアイヌ語語彙集だけが未だ翻刻されていなかったことになる。

筆者はくずし字辞典や『藻汐草』を頼りにNo.89を翻刻し、その後、アイヌ語の解釈に関する情報をエクセルファイルにまとめていった。それを元に作成したのが、本稿の4.4節に掲載した語彙リストである。筆者が通う千葉大学では週に一度アイヌ語の勉強会をしていたので、出来上がった

²⁰ モニターによる査読の段階では、金沢家文書の語彙集は美幌方言に最も近いという結果が出ていた。しかし、その後、上原熊次郎の『藻汐草』を加えて再計算したところ、最も近いのは釧路方言であるという結果に変わってしまった。小野氏に確認したところ、方言や資料数を増やすということで、互いの関係性が変わることがあるということであった。

語彙リストは勉強会のメンバーにも一度見て頂いた。2時間弱で全体を確認してもらったにすぎなかったが、特に遠藤志保氏からは内容に関わる重要なご指摘を頂いた。例えば、筆者が「苔 ペウクキナ (<pe-uk-kina 水・をとる・草)」と読んでいたところは、「紫 ペウレキナ (<pewre-kina 若い・草)」であるということが判明したし、「習鴨 ヲセンチリ(<osen-cir ?・鳥)」と読んでいたところは、「ヲロンチリ (<wor-un-cir 水・にいる・鳥)」ということで解決した(なお、和語見出しの「習鴨」は、後に「羽白鴨」と筆者が判断し、修正した)。勿論、他にも示唆に富んだご指摘はあったが、大きなところではこの2点であったのではないかと記憶している。

翻刻については、和語見出しで筆者が読めなかった箇所を中心に東氏に見て頂いた。なかには数通りの可能性を残したものもあったが、4.3節に記載した翻刻は、最終的に筆者が取捨選択をして作成したものである。万が一、誤りが見つかったとしても、それは全て筆者に責任があるものとする。

4.2. 注意事項

注意事項を三点ほど述べておく。まず一点目に、何度も言うようであるが、筆者は原本を確認できなかったということである。原本さえあれば解決したであろうという箇所も少なくない。例えば、本文中の字消しや書入れについては、元々がモノクロコピーであることから朱書かどうか判断できず、どちらが書入れなのかわからないということが往々にしてあった。ひとまずの対処として、アイヌ語解釈からより適切と思われる方を「書入れ」と判断していることもあれば、見るからに「書入れ」前であっても、形態素分析にはそちらを採用していることもある。いくぶん筆者のバイアスがかかっている可能性のあることを、予め御断りしておきたい。

二点目に、アイヌ語の分析に関わって筆者がローマ字化を試みているが、これには幾つかの可能性があり、その全てを提示できているわけではない。現代のアイヌ語辞典や語構成をもとに、筆者が提案したものである。

三点目に、翻刻についてはできる限り原本に近い体裁で作成している。字消しや書入れの多い箇所は非常に入り組んだものとなってしまうので、画像と合わせてご確認頂ければ幸いである。

2 オ

支那の部

変死 ヤエシチバシ
エンチンハレ

急死 ノチウン

遠近兼ル
泪波 シキウトウ
ウカレウシ
両眼言

泪下ル シキヘヌ
ワカセトク

不孝 ヤエキマエハ

孝 ウヌハカ

子二仇 ウキマエバ

腹痛 トエチヌエバ

(味カ)

叱 マウサク

めまゑ シユ
エ

左手 ハリカテキ
テケ

右手 シモンテキ

衣食之部

「 」ワタマ

美味 ルリコル

「これ以降欠損」

2 ウ

「これ以前欠損」

「 」 シユニ
「 」 タモ木 ビンニ 榎^{シナ} (エ)ン
クビリケフ
「 」 季 モマ

蓬草^ユ チノタルヘ 胡着^イ イチヤリ 杜若^カ イソシタラ

路^ア コリコニ 菖蒲 クシルリコ 蕨^リ リフウ

紫蕨 シヨロマ 嫁菜 ニウ子^ニ キン るヒ シンヒロ

餅粟^モ アマンチロ 黍 シフケア 稗^稗 ビヤバ

小豆 ニムマメ 舞茸 ユウカルシ 紫^紫 ベキナリ

木茸^ウ カルニシ 鬼釜^リ リキムニ 防風^防 エラシエバ

互言イかためる事 ウエタクラヌレ シヤマ子
 仇^シル コウエン 樽 ウコシ^{□□□} 斷 フシユルアシテ 斷 ウエベケレ
 アタ
 思ふ ヤエコベケレ 然し コラカエキ 当惑 ヲヤ
 心思^ぶ ラムイヨツ 同道 ウエシンヲマン ムクテ
 ウエシン子ヲマン
 滅^々就 ウエハル ^{□□}テ行 アリア^{ナカイ}
 ヲマン
 寄麗 アシカン子 手[□]して[□]扱^ウ
 ウエテンタシハレチセフミセ
 寄付^ッ エンコタク 理屈強^イ イエカウノ
 「^{~~~~~}」 「^{~~~~~}」
 夫婦喧嘩 ウコルナコル 遺言 イタキシユラ

4 木

此世の初より来世未迄 タンモシリヘベンケ
 ヲロワフシユセコエチユ
 子イハクノカ
 「^{~~~~~}」
 家さかす イヨ^ヲ ハシクカリ 香奠^ヲ
 ナシラム
 膝折 クリムレレ 葬礼送^り キモヌヲバ 見合
 ル^ル^ロ シリウワンテ
 カトウワンテ
 赤面 ヤボロシヤク 相見して居事 ウトベクシユ
 助^シ ウケウ[□]ヅシヤレ 掠 物^{ウク□□□}
 つぎ^るル
 トモヲシマ
 □^{シヤレ}
 口過 ヤイバルヲシリベ 仇返 ウコラムタシヤ
 「^{~~~~~}」
 留^主 ヲハシルイ 咎^々 エコランバ
 繁昌 □^ホス^セ 心強 ヤエシヤンヘ
 シケレ
 蛇子男 イソン[□]クル 躡踏^テンヤ <
 ヲンルブシアシカエクル クテン <

貧 ヤヤンベ

貧弱 (エンル
ヌカルクル

訴人 イヨヌ^シ
イヨマフ^六
エトセフ
ウケウカンケ

滞 イシカリ

中ニ立 ハウトルカル
シリカトレン
様子 カトレンカエ

揃 ウトカンケ

5 オ

(懲カ)
□ルセサ ヤウンチシテ

遙 ホマ^ヲマンノボ
ホマルノボ

好 ^テエ
パケイ

網^ム テシヤウ

未不成 ラナンタク

隠 スイナ

拾ふ ウエナ

「
とふして マイ子

飼置 レシユ

負 エラホカレ

傍 シコロケ

不聞 シアシハレ
ふり

金 □ ヤエク^ク
ア^レシ^レ

「
追 イヨカ^ツ
イ^シ
タン
エカリラマン

□□ ヤヨラロ
カレ

訴 ヤエラフ

茹 シヤカンケ
ユテル

鍵に而 イヨクテ

「
人仕事^ト ラムイクシ
絶

追^ニ行^ヒ ウヒ、
ア^リ、
□□^アン

誰^ヲきふてやれ
ユウタラレヲマンテ
ウエテクトモ^ニ五^ツ

疑ふ ウコエラチ

イオカ^無 ラムシヤ
ラムイシヤ^マ

「
集 ウエカレ
シナシケ

招 エヌチウエ
ユエ

むしろ リセ

勝 エカウシ

仕方見^エ □^コラム
ヌカル

上 ラ^ク

無代て 貴 ぶ	ウンケライ	登 ニム
往来	ハエカエ	賢ィ ヤワシ
むつと	ム シラホロ	悪 エイホロ
して居	カシヤケ レ	
懼	ヲワイ メク	不聞□□ ヨマツバレ
卷上ル	マコライ	袋卷 モリ 上る ホリキラエ
□御聞	ムウク トモコキ アエノ	消 ニレ
「	」ラ	□ □□□
「これ以降欠損」		

5ウ

「これ以前欠損」		
「		」(柄) ナキ子
「		」成程 エ子ア クシユ
「」ア		」自慢 イシヤトエ クマクシテ
「」寄	グシ	」身送 クヤンカブ
(立) □腹	キマエハ	」返礼 ヤツタシヤ
あきれ	シ□□□ツキ	」心 ^ニ 思 ^ふ 事 ルイシカ ンナカ
		□□□□
届	ヲウシテ	」用心 ヤエラ マツテ
吟味	シエトウヒセレ ア	」無覚束 ウシヤシラム ツイハム
走ける	ウバ□シ テ	」かひろ グミウシ

タンエタク スカラ シユウンケイタク
タバナ

4. 4. 金沢家文書 (No.89) 語彙リスト

凡 例

○編集方針

1. 「金沢家文書」(No.89) の語彙集部分について和語見出しとアイヌ語の翻刻およびそれに対する補足情報を記載した。アイヌ語逆引き小辞典のような体裁をとっている。見出しの数は301。

例) ①イタクマクシテ ②itakmakuste(?) ③【動1】④自慢 || ⑤(< itak-mak-uste 言葉・後ろ・～を～につける) ⑥自慢する ⑦※要検討; ⑧《参考》itakmakuste 「他の人にわからないように、間接的な表現を使う」(歳N); ⑨《藻》自慢 イタクマクシテ。 || ⑩「イタクマク」の右横に「シャトエ」と書き込まれているが不明。⑪ (5ウ:289)

①アイヌ語：原文翻刻。

②ローマ字表記：深澤 (2014b) を参考にした。

③品詞：可能な限り記載した。

④和語見出し：原文翻刻。

⑤語構成分析：可能な限り記載した。

⑥現代日本語訳：現代のアイヌ語辞典と和語見出しから推定される訳を記載した。

⑦未詳・要検討：以下、2を参照。

⑧参考・方言：以下、3を参照。

⑨藻汐草：以下、3を参照。

⑩翻刻等に関わる補足：その語彙が属する部門（「天地之部」など）や字消し、書入れについて記載している。

⑪ (丁：通し番号)：通し番号は1丁表から語彙の順につけた番号である。

2. 不明が残る語形については「未詳」や「要検討」として注記した。

「未詳」：殆ど手掛かりとなる情報がなく不明である。

「要検討」：数少ない情報はあるが品詞、意味解釈等において未解決部分が目立つ。

3. アイヌ語の補足に関わって、参考と方言の3種の別を用いた。

《参考》：多くの辞典に掲載されているような語の意味は、中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』や田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』から多くを引用した。なお、似たような語形やわずかな情報しか得られないような語については、可能な限り参考となりうる情報を盛り込むことにした。

《方言》：方言差が見込まれるものについては、服部四郎 (編)『アイヌ語方言辞典』を中心に記載した。

《藻》：上原熊次郎著の『藻汐草』から、和語見出し及びアイヌ語に関連・対応するものを抜き出した。部分的に関連する場合であっても可能な限り引用したが、煩雑になるので省略した場合もある。

4. バチェラーの『アイヌ・英・和辞典』を参考にした場合は英語部分を引用し、丸括弧内に深澤による和訳をつけた。
5. アイヌ語の引用の際、声門閉鎖音を表す記号 (') は断りなく省略した。

○編集記号

- ・スラッシュ (/) : 別の解釈可能性。
- ・亀甲括弧 ([]) : ローマ字表記の異綴り形。
- ・クエスションマーク (? , ?) : 不明・不詳。
- ・四角 (■) : 欠損・読み取り不可。
- ・指 (☞) : 参照せよ (主に同一見出しの語に対して記載)。

○品詞略号

【動0～3】	0～3項動詞	【接助】	接続助詞
【名】	名詞	【間投】	間投詞
【位】	位置名詞	【助動】	助動詞
【場】	場所名詞	【格助】	格助詞
【形名】	形式名詞	【終助】	終助詞
【副】	副詞類	【人接】	人称接辞

○出典略号

(B)	バチェラー、ジョン『アイヌ・英・和辞典』第4版
(C植)/『知里植物編』	知里真志保「植物編」『知里真志保著作集別巻Ⅰ：分類アイヌ語辞典植物編・動物編』
(C人)/『知里人間編』	知里真志保『知里真志保著作集別巻Ⅱ：分類アイヌ語辞典人間編』
(C地)	知里真志保『地名小辞典』
(C動)/『知里動物編』	知里真志保「動物編」『知里真志保著作集別巻Ⅰ：分類アイヌ語辞典植物編・動物編』
(H)/『方言辞典』	服部四郎(編)『アイヌ語方言辞典』
(Kb)	久保寺逸彦『アイヌ語・日本語辞典稿』
(Kg 蝦和)	加賀伝蔵「〔蝦夷語和解〕」『蝦夷方言 藻汐草 [写]』(資料番号：49)
(Ky)	萱野茂『萱野茂のアイヌ語辞典』
(K和)	金田一京助『和愛辞典』(知里真志保「動物編」より引用)
(MJ 植)	宮部金吾・神保小虎『北海道アイヌ語 植物名詳表』(知里真志保「植物編」より引用)
(N)	中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』
(Ok)	奥田統己『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集 (CD-ROMつき)』
(T)/『沙流方言辞典』	田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』
(Tr)	鳥居龍蔵『千島アイヌ』

○方言略号一覧

八：八雲/ 幌：幌別/ 沙：沙流/ 歳：千歳/ 静：静内/ 帯：帯広/ 美：美幌/ 釧：釧路、春採/
 旭：旭川、近文/ 名：名寄/ 宗：宗谷/ ラ：ライチシカ(樺太)/ 千：シュムシュ(北千島)/ 樺太：
 樺太全域/ 北海道：北海道全域

上記以外の地名については、略号を用いずに記載した。ただし、次の地名についてはより大きな市町村名に変更した。

- ・タカシマ→池田
- ・モコト→網走
- ・荻野→白老
- ・荻伏→浦河

金沢家文書 (No.89) 語彙リスト

- アキ ak, -i 【名】弟 || (～の) 弟; 《方言》方言差は大きくない。北海道では ak, aki(hi) という形式が用いられ、ライチシカでは ahkapo, -ho が使用される (cf. 『方言辞典』); 《藻》弟 アキ。|| 人倫之部。(1ウ: 56)
- アシカン子 askanne 【動1】寄麗 || きれいな。清潔な; 《方言》「きれいな」askanne (幌, 沙, 帯, 美, 名H; 歳N), askannenoo (樺H), askanep (旭H); 《藻》奇麗 アツカン子、アシカン子。|| (3ウ: 164)
- アチャ aca 【名】父 || (～の) 父; 《方言》「父」を表す語形は方言差が大きいため、ここでは同系の語形のみとりあげる: aca, -ha (宗H), aaca, -ha (ラH), acapo (八H); 《藻》父 ハンベ、ミチ、アチャ。☐ミチ、ケウシト。|| 人倫之部。(1ウ: 50)
- アトエ atuy 【名】海 || 海; 《方言》広く見られる語形: atuy (北海道, ラH); 《藻》海 アツイ、ルハ。|| 天地之部。(1オ: 26)
- アフト apto 【名】雨 || 雨; 《方言》apto (幌, 沙, 名H), ahto (ラH); 《藻》雨 アプト、ルアンベ、ベニ、ウエニ。☐ウエニ、ルアンヘ。|| 天地之部。(1オ: 8)
- アブラシヤンベ ahunrasampe 【名】ミ、ツク || コミミズク; 《参考》ahunrasampe 「コミミズク」(幌, 旭C動; 沙T, etc.); 《藻》ふくろ クン子レキ、カモイチカプ。|| 気形之部。(3オ: 121)
- アマ、チリ amam(a)cir 【名】雀 || スズメ(雀); 《方言》amamecikap(po) という方言が多く、『方言辞典』では美幌でのみ amamecir が確認できる。『知里動物編』によると屈斜路でも言うようである; 《藻》雀 アマムチリ、シヤイコツチリ。|| 気形之部。(3オ: 111)
- アリアナカイ ヲマン arianakay(?) oman 【? + 動1】■■テ行 || (< arianakay (?), oman 行く) ※未詳; 《藻》一。|| 和語見出しは汚れのため読み取り困難。(3ウ: 163)
- アンカリノ ankarino(?) 【副】有駄 || ※未詳; 《藻》一。☐シヤラノ。|| (4ウ: 229)

イカシ ekasi【名】祖父||祖父;《方言》北海道で広く見られる語形: ekasi/ ekas, -i (北海道H), henke, -he (ラH);《藻》

祖父 イカシ。||人倫之部。(1ウ:53)

イカノノテ ekanok(?)【動2?】向ニ行||～を出迎える※要検討;《参考》カタカナに合致しないが、近いものに次の例がある:「出迎える」ekanok (幌, 沙H), ekanhok (八H), ekanuh, -k (ラH);《藻》-。|| (3ウ:135)

イカベケレ ikapeker(?)【?】譲ル||※未詳;《藻》譲り イカビウケ。|| (4オ:197)

イシカリ isikari【動1】滞||滞る;《参考》Ishikari [isikari] 「Constipation. Stopped up. (停滞、閉鎖された、ふさがった)」(B)。このほかに「回流する」(Kb, B) という意味もある;《藻》滞 (トゴコフ)る イシカリ。|| (4ウ:240)

イシカルンナ esikarun na(?)【動2+終助?】心ニ思ふ事|| (< esikarun-na ~を思い出す・よ) ~を思い出すよ※要検討;《方言》esikarun (八, 幌, 沙, 帯, 美, 名, ラH), eskarun (旭H);《藻》忘れまいぞ イシカルンナ、イテキヨイラヤ。|| (5ウ:294)

イシヤマニ esaman【名】獺||カワウソ(獺);《方言》広く見られる語形: esaman (北海道, ラH);《藻》獺(かはうそ) イシヤマニ。|| 気形之部。(3オ:104)

イソンクル isonkur【名】虯子男|| (< isonkur 獲物に恵まれる・人) 獵運に恵まれている人;《参考》isonkur 「狩の名人」(沙Ky; Kb), 「狩運に恵まれたる人」(Kb);《藻》-。☞ランルブシアシカエクル。|| (4オ:187)

イタクシユラ itaksura【動1】遺言||

(< itak-sura 言葉・を離す) 遺言する;《参考》itaksura「遺言する」(歳N; 沙Ky);《藻》-。|| (3ウ:169)

イタクマクシテ itakmakuste(?)【動1】自慢|| (< itak-mak-uste 言葉・後ろ・～を～につける) 自慢する※要検討;《参考》itakmakuste「他の人にわからないように、間接的な表現を使う」(歳N);《藻》自慢 イタクマクシテ。|| 「イタクマク」の右横に「シヤトエ」と書き込まれているが不明。(5ウ:289)

イチヤリキナ icarikina【名】胡着|| (< icari-kina それ・を散らす・草) コジャク;《参考》icarikina「コジャク」(北海道各地C植);《藻》こじやく(蛇状子) イチヤリキナ、イチヤリボ。|| 衣食之部;「胡若」ではなく「胡着」と書かれている。(2ウ:85)

イツアイノコル(1) eci=aynukor【人接+動2】重ル|| (< eci=あなたたちが/を (2人称複数主格/目的格)、aynukor 敬う) あなたたちが～を敬う。～があなたたちを敬う;《方言》aynukor「敬う、尊敬する」(八, 名, 沙, 帯, 美H), aynukoro「敬う(丁寧にする)」(ラH);《藻》重んず イトモコケアイヌ、アイノコル。☞イトモコケンアイノコル、イツアイノコル(2)、エ子アイノコル。|| (4オ:193)

イツアイノコル(2) eci=aynukor【人接+動2】向ヲヨリ重ル|| (< eci=あなたたちが (2人称複数主格)、aynukor 敬う) あなたたちが～を敬う;《方言》aynukor「敬う、尊敬する」(八, 名, 沙, 帯, 美H), aynukoro「敬う(丁寧にする)」(ラH);《藻》重んず イトモコケアイヌ、アイノコル。☞イトモコケンアイノコル、イ

- ツアイノコル(1)、エ子アイノコル。 || (4オ:195)
- イトナウ itunap(?) 【名】 蟻 || アリ(蟻); 《方言》 itunap (様似, 屈斜路, 美C動; 帯, 名H), itunnap (八, 幌, 沙, 旭H), irici (宗H), iriyaci (ラH); 《藻》 ー。 || 気形之部; 「イ」は字消されているようにも見えるが、ここではアイヌ語に合わせて「イトナウ」としておく。(3オ:130)
- イトモコケンアイノコル itomokoken aynukor (?) 【?】 重ル || (<itomokoken-aynukor (?)・を敬う) ※未詳; 《参考》「重んじる」という意味であろうが、推定語形は不確定; 《藻》 重んす イトモコケアイヌ、アイノコル。☐イツアイノコル(1), (2), エ子アイノコル。 || 「コル」の左側に「モノ」と書かれている。(4オ:192)
- イトヤシカラフ ituyaskarap 【動1】 面倒 || (<i-tuyaskarap もの・を憐れむ) 面倒をみる ※要検討; 《参考》 Ituyashkarap [ituyaskarap] 「To love. To fondle. (～を愛する、～をかわいがる)」(B), tuyaskarap 「～を憐れむ、～に同情する」(沙T; Ky); 《藻》 いとしい イヅアシカラフ。面倒 ヤイチアシカラフ、イトヤシカラフ。 || (4オ:205)
- イモカ imoka 【名】 ■産 || 土産; 《方言》『方言辞典』に記載の無い方言でも確認でき、広く使用されている: imoka (旭, 名, 宗, ラH), imeka, -ha (八H); 《藻》 素物 イモカ。紵 又みやげ イモカ。 || 「産」の前部は欠損。(3ウ:131)
- イヨカ タン エカリヲマン ioka ta ekari oman(?) 【位+格助+副詞+動1】 追イシ || (<ioka その後、ta に、ekari に向かって、oman 行く) その後に向かって行く ※要検討; 《藻》 ー。 || (4ウ:239)
- イヨカヌカル iyokanukar 【動1】 餞別 || (<i-y-oka-nukar それ・(わたり音)・の後・を見る) ～を見送る ※要検討; 《参考》『方言辞典』の「見送る」という項目に類似の表現がある: iokanukar (八H), ioka inkar (宗H), oka inkara, yooka inkara (ラH); 《藻》 ー。 || (3ウ:141)
- イヨクテ iyokte 【動2】 鍵に而 || (<i-y-ok-te それ・(わたり音)・をひっかける・させる) ～を鍵にひっかける; 《参考》 iyokte 「～をかぎ状のものでひっかける」(沙T) など; 《藻》 ー。 || (4ウ:248)
- イヨシコテ iyosikkote 【動1】 女惚ル || (<i-y-osikkote 人・(わたり音)・に惚れる) 人に惚れる; 《参考》 iyosikkote 「恋をする」(沙T), iosikkoe 「人に惚れる」(静Ok) など; 《藻》 ー。 || (4ウ:218)
- イヨヌシバ eyonuppa(?) 【動2】 訴人 || (<e-i-onuppa について・人・に訴える) ～について訴える; 《参考》 eiyonnuppa /eyyonuppa 「～のことを告げ口する、訴える」(沙T), Eiyonuppa 「To accuse of a crime. To complain about. (～について訴える)」(B); 《藻》 ー。 ☐イヨマフ、エトセフ、ウケウカンケ。 || (4ウ:235)
- イヨマフ(1) iyomap(?) 【?】 所立迄(?) || ※未詳; 《参考》 iyomap は「子どもをかわいがる」(沙T) などという意味で

あって、和語見出しに合わない；《藻》一。

|| (3ウ：149)

イヨマフ(2) iyomap(?) 【?】 訴人 || ※未詳；
《参考》iyomap は「子どもをかわいが
る」(沙T) などという意味であって、
和訳に合わない；《藻》一。☐イヨヌシ
バ、エトセフ、ウケウカンケ。|| (4ウ：
236)

イヨラムシヤクカ iyoramsakka 【動1】 人
をふみ付す || (<i-y-oramsakka 人・
(わたり音)・を見下げる) 人を見下げる；
《参考》iyoramsakka 「人を侮辱する、
馬鹿にする」(沙T), ioramsakka 「見下
げる(いやがらせをする)」(旭H),
oramsakka 「見下げる(他動詞)」(八,
沙, 帯, 名, 宗H)；《藻》一。|| (4ウ：214)

イライコチ子 eraykotne 【副?】 左より || 仕方
のないことに ※要検討；《参考》
eraykotne 「仕方のないことに」(Ok)；
《藻》及もない イライコツ子。|| (3ウ：
137)

イラムシユイカレ iramusuykare(?) 【動2?】
疑 || ～を疑う ※要検討；《参考》iramu-
suye 「たばかる、あざむく」、「たまげ
た(間投詞)」(Kb) が近いが不明。「～
の知識がない、～の経験がない」という
意味の eramuskare (美H；静Ok) や
iramushkari [iramuskari] (千Tr) の
可能性もある；《藻》疑ふ ウンビニ、
ウンヒ、カ。知らぬ イラムシカレ。た
ばかる イラムシユイ。|| (3ウ：138)

イラムヘガマ、 irampekamama 【動1/間
投詞】 一 || つらい ※要検討；《参考》
irampekamama 「やかましい」(帯H),
「難儀する、つらい、(間投詞的に) 苦労
だなあ」(沙T)；《藻》一。☐エ子カリ

イー子ヤ。|| 「一、家親類難儀にて不ニ
居いたし立直るや/イラムヘガマ、無
心元なく エ子カリイー子ヤ」という一
節の中にある。(3ウ：142)

イエカウンノ eykaunno 【副】 理屈強イ ||
(<eykaun-no 優勢である・副詞化接尾
辞) 優勢であって；《参考》eykaunno
「他よりまさって、優れて」(沙T),
eykaun 「優勢である」(歳N)；《藻》理
屈強い イ、カウン。|| (3ウ：167)

ウカルカ ukarku(?) 【名】 徒弟 || 徒弟 ※要検
討；《参考》加賀家文書に、「ウカルク」
が確認できる。和訳は「徒弟」であり、
その語源解釈は「互いの甥」となってい
る (Kg蝦和)；《藻》徒弟 イリワキ、
イワクタリ。|| 人倫之部。(1ウ：62)

ウキマエバ ukimaypa 【動1】 子ニ仇 || (<u-
kimaypa 互い・言うことを聞かない)
子に仇をうつ ※要検討；《藻》一。☐ヤ
エキマエハ。|| 支躰之部。(2オ：73)

ウクルベ ukurpe 【名】 八目 || ヤツメウナギ；
《参考》ukurupe 「ヤツメウナギ」(トン
ナイ, シラウラC動；名H), ukuripe
「ヤツメウナギ、カワヤツメ」(幌, 厚真,
美, 名C動；沙H)；《藻》ハツ目鱈 ス
クリイベ、シユマルラブ。|| 気形之部。
(3オ：124)

ウケウカンケ ukewkanke(?) 【?】 訴人 || ※
未詳；《藻》一。☐イヨヌシバ、イヨマ
フ、エトセフ。|| (4ウ：238)

ウケウヅシヤレ (ウケシヤレ) ukewetusare
(?) 【動1】 助シ || (<u-kewe-tusare 互
い(?)・～の体・を治す) 治る ※要検討；
《参考》kewetusare 「身を生かす、よみ
がへらす」(Kb)；《藻》一。|| (4オ：
179)

- ウコケウエタキ ukokewetak【動2?】敵打
 || (<u-ko-kewetak 互い・に・(?)) ※
 未詳；《参考》Kewe-tak「A fine for
 murder. (殺人の罰金)」(B)；《藻》－。
 ☞ケウエダキ。|| (3ウ：144)
- ウコニカルシ uko(m)nikarus(?)【名】木茸
 || (<u-komni-karus (?)・柏・キノコ)
 椎茸；《参考》語頭の「ウ」については
 不明：komnikarus (塘路, 屈斜路C植；
 上川MJ植)；《藻》茸 カルシ カツパ
 ラ。|| 衣食之部。(2ウ：99)
- ウコラムタシヤ ukoramtasa【動1?】仇返
 || (<u-ko-ram-tasa 互い・に・心・と
 交換する) 仇を返す※要検討；《藻》仇
 をかへす ウコラムタシヤ。|| (4オ：
 182)
- ウコルナコル ukornakor(?)【?】夫婦喧嘩
 || (<ukor-nakor 夫婦・(?)) ※未詳；
 《藻》－。|| (3ウ：168)
- ウコエラチ ukoeraci(?)【?】疑ふ※未詳；
 《藻》疑ふ ウンビニ、ウンヒ、カ。||
 (5オ：258)
- ウシヤシラムツイハ usasiramtuypa(?)【?】
 無覚束※未詳；《藻》覚束なし ウシ
 ヤシラムツイバ。|| 「束」とははっきり
 読めない。(5ウ：298)
- ウタシバレ utaspere【動2】御互|| (<u-tas
 (a)-pa-re 互い・交換する・複数・させ
 る) ～を交換する；《参考》utaspere
 「とりかえる、交換」(沙, 美H),
 ukoutaspere「とりかえる、交換(物々
 交換)」(ラH)；《藻》互に モイリ、ウ
 タシバ。|| (4オ：202)
- ウチャケウトモ ucakewtum(?)【?】不行届
 || ※未詳；《藻》－。☞シユエンテ。||
 (4ウ：222)
- ウトカンケ utukanke【動1?】揃||揃える；
 《参考》eutukanke「(アワの穂など)束
 ねる」(沙Ky), Etukange [etukanke]
 「To set in order. (並べる)」(B)；《藻》－。
 || (4ウ：247)
- ウトシマク utusmak【動1】■●|| (<u-
 tusmak 互い・と競争する) 競争する；
 《方言》「競争する」uwetusmak (幌,
 沙H), utusmak (帯H)；《藻》－。||
 和語見出しは破損により読み取り不可。
 (4オ：204)
- ウトバ utupa【動1】■絶||離別している※
 要検討；《参考》utupa「この世とあの
 世とに別れている(「仏になった人に言
 う、そのほかには言わない)」(沙T)；
 《藻》絶交(なかつがい) ルツバ、ウツハ。
 || 破損により読み取り困難。(4オ：207)
- ウトベクシュ utopekusu(?)【?】相見して
 居事||※未詳；《藻》－。|| 「モ」の上
 に「ベ」と書きなおされているように見
 える。(4オ：178)
- ウナルヘ unarpe【名】伯母||おば；《方言》
 広く見られる語形：unarpe (北海道H),
 unahpe, -he (ラH), unarape [老人語
 (ラH)；《藻》伯母 コンナリベ。|| 人
 倫之部。(1ウ：60)
- ウヌ、カ ununuka【動1】孝|| (<u-nunuka
 互い・を大事にする) 孝行する；《参考》
 ununuke「親孝行する」(沙Ky, T)。な
 お、静内では、nunuke ではなく
 nunuka (Ok) という形をとるようで、
 道東方言の特徴が出ている可能性がある；
 《藻》－。|| 支躰之部。(2オ：72)
- ウ子ニノキ unenninoki(?)【名】嫁菜||※
 未詳；《藻》－。|| 衣食之部。(2ウ：91)
- ウバシ upas【名】雪||雪；《方言》方言差は

音韻レベルであり、広く用いられる：
upas (八, 幌, 沙, 帯, 美, 旭, 名H),
opas (宗, ラH)；《藻》一。|| 天地之部。
(1オ:16)

ウパシテ upaste 【動1?】走けろ [走ける?]
|| (<u-pas-te 互い・走る・させる) ※
要検討；《参考》upashte [upaste] 「謎
の解けない時のいじめ文句<走らせる」
(Kb)；《藻》走る チャージ、ホユブ。
|| 「ろ」ではなく「る」か。(5ウ:299)

ウヒ、 アリアン [ウヒ、 パイアン (?)]
upipi arian(?)/(upipi paye=an) 【副+
動1 +人接】追々行 || (<upipi 次々、
paye 行く、=an (聞き手を含む)私たちが/
人が(4人称自動詞主格)) 次々と行く
※要検討；《参考》「アリアン」につい
ては不明。upipi upipi 「次々、順繰り
に」(歳N)；《藻》追々行 ウビ\ / パ
イアン。|| 書入れは「アリ」のように見
えるが、字消しされているものは「パイ」
だった可能性がある。(5オ:253)

ウビルマ unpirma 【動1】伺ふ || (<un-
pirma 人に・告げる) (カムイなどが)
人に告げる；《参考》unpirma 「警告す
る、危険を告げる」(沙T), umpirma
「(カムイが)知らせる」(歳N) など；《藻》
内々に聞く ウンビルマ。|| (4ウ:217)

ウライケ urayke 【動1】互ニ死に || (<u-
rayke 互い・を殺す) 殺し合う；《参考》
urayke 「殺し合う、果し合いをする」
(沙T)；《藻》戦ふ ウライケ。|| (3ウ:
150)

ウラリ urar 【名】霧 || 霧；《方言》urar が
「もや、かすみ」、rakur が「霧(雨)」
を表すように使い分けられていることも
ある。八雲では siskur(H) という語形

も採録されている：urar (八, 沙, 帯,
旭, 名, 宗H), hurar (美H), uurara
(ラH)；《藻》霧 ウーラリ。|| 天地之
部。(1オ:13)

ウエカレ uekari 【動1】集 || 集まる；《方言》
uekari (八H), uwekari (幌, 旭, 名H),
weekaari (ラH), uekarpa (八, 帯, 美
H), uwekarpa (幌, 沙, 名H)；《藻》
集む ウエカリ。|| (5オ:263)

ウエスカヒ uesikapi 【動1】相惚 || (<u-e-
sikapi 互い・について・惚れる) 互い
に惚れる。両想いである；《参考》加賀
家文書にも見出される語形。浅井 (1972:
150) によれば、砂沢クラ氏が「シカビ
とは好きになることだと思う」と述べた
そうである。狩野 (2007:31) でも、
wenpe uesikapi で「素行のよくない者
同士相親しむ」とある；《藻》一。☐ウ
エスコフ。|| (4ウ:219)

ウエスコフ uesikapi 【動1】相惚 || (<u-e-
sikapi 互い・について・惚れる) 互い
に惚れる。両想いである；《参考》加賀
家文書にも見出される語形；《藻》一。
☐ウエスカヒ。|| (4ウ:220)

ウエタクロヌレ uytaknure 【動2】互ニ言イ
かためる事 || (<u-itak-nu-re 互い・言
葉・を聞く・させる) 一方が他方の言う
ことを聞かせる；《参考》uitaknu 「互
いに/一方が他方の言うことを聞く、同
意する」(沙T)；《藻》一。|| 「ヲヌレ」
の右側に「シヤマ子」と見えるが不明。
(3ウ:151)

ウエテク uytek 【動2】誰ぞきふてやれ || ~
を使いにする；《方言》『方言辞典』によ
ると、uytek は宗谷を除く北海道で用
いられる。ライチシカでは uteh, -k；

- 《藻》一。|| 「ウエテクトモ云之」というのは、「ユウタラレヲマンテのほかにウエテクトモ言う」という意。☐ユウタラレヲマンテ。(5オ:256)
- ウエテンタシハレチセフミセ uetentaspere
cisehumise(?) 【?】手■して■扱ウ||※未詳;《藻》一。|| 和語見出しについては読み取り困難。(3ウ:165)
- ウエト子ンカリ uetunenkar 【動1】行合|| (<u-etunenkar 互い・に) 出会う;《参考》「出会う」uetunenkar (美H), uetunankar (八H), uwetunankar (幌H), uwetunankar (沙H), uetunenkar (帯H), 「～に出会う」etunenkar (静Ok) など;《藻》一。|| (4オ:206)
- ウエナ uyna 【動2】拾ふ|| (uk の複数形) ～を拾う;《方言》『方言辞典』で uyna は「拾う」や「取る」として美幌を除く北海道とライチシカに採録されている;《藻》拾ふ ウイナ。|| (5オ:265)
- ウエニ weni 【名】雨|| 雨;《方言》weni (八H);《藻》雨 アプト、ルアンベ、ベニ、ウエニ。☐アフト、ルアンへ。|| 天地之部。(1オ:7)
- ウエ子ウシヤレ uenewsar 【動1】物語|| よもやま話を語り合う;《参考》uenewsar 「よもやま話を語り合う」(歳N), uwenewsar 「昔話やユーカラ(英雄叙事詩)を語ったり聞いたりなど、互いにいろいろ話し合って楽しむ」(沙T) など;《藻》一。|| (4オ:201)
- ウエハル uepare 【動2】滅就|| (<uepa-re 達する・させる) ～を成就させる;《参考》uepare 「(～という状態)にいたらせる」(歳N), 「～に近づく」(静Ok);《藻》成就 ウエカル。|| 「成」にさん
- ずいが付いている。(3ウ:162)
- ウエベケレ uepeker 【動1】/【名】噺|| (<u-e-peker 互い・に・明るい) 散文説話(を語る);《参考》u(w)epeker は、「散文説話」(歳N) という名詞でも「民話(昔話)を語る」(沙T) という1項動詞でも用いられる;《藻》風説 ウエベケレ。|| (3ウ:155)
- ウエンクラシハ wenkuraspa 【動2】蔑|| ～を蔑む;《参考》wenkuraspa 「軽蔑する、馬鹿にする、蔑む」(沙Ky), 「怒鳴る」(Kb);《藻》亡ふ ウエンクラシハ。|| (4ウ:213)
- ウエンシン子ヲマン uesinne oman 【副?+動1】同道|| (<uesinne (?), oman 行く) 一緒に行く※要検討;《参考》Uweshiren [uesiren] 「To accompany another (他の～に同行する)」(B)が近いだろうか;《藻》同道 ウエシレン、シ子ライ。☐ウエンシンヲマン。|| (3ウ:161)
- ウエンシンヲマン uesin oman 【副?+動1】同道|| (<uesin (?), oman 行く) 一緒に行く※要検討;《参考》Uweshiren [uesiren] 「To accompany another (他の～に同行する)」(B)が近いだろうか;《藻》同道 ウエシレン、シ子ライ。☐ウエンシン子ヲマン。|| (3ウ:160)
- ウンケライ unkeray 【動1?】無代で貰ふ|| ものをもらう;《参考》unkeray 「贈り物をもろう、いただく、授かりものがある」(沙T) など;《藻》貰ふ ウンケライ。|| (5オ:275)
- カトウワンテ katu-uwante 【名+動1?】/【動1?】見合|| ～の姿を見合う;《参考》uwante 「比べ合う(?)」(沙T),

- 「合成動詞のなかで「～をよく見る」の意味で用いられる」(静Ok)など。ここでは「姿をよく見る(見合う)」というような意味であろうか；《藻》一。☐シリウワンテ。|| (4オ：176)
- カトレンカエ katu renkay(?) 【名+動2】様子 || (<katu ~の姿、renkay の意向を述べる) 様子にしたがう※要検討；《参考》katuren kayne 「なりゆきにしたがい」(沙Ky), katu-renkai-ne 「この事態のままに由つて、ここに、事によつて、次第によつて、時によつて」(Kb)；《藻》一。☐シリカトレンカエ。|| (4ウ：245)
- カバフ kapap 【名】蝙蝠 || コウモリ(蝙蝠)；《方言》広く見られる語形。『方言辞典』において、宗谷は「忘れた」と記載されているが、北海道とライチシカでkapap が使用される；《藻》舢(イタチ) コウモリ カバフ。|| 気形之部。(3オ：119)
- カムイチカフ kamuycikap 【名】梟 || (<kamuy-cikap 神・鳥) フクロウ(梟)；《方言》『知里動物編』によれば「シマフクロウ」(幌)のこと。広く見られる語形ではあるものの、宗谷ではahunrasanpe というなど方言差のようなものも知られている：kamuycikap (八, 幌, 美, 旭, 名H), kamuycikap(?) (沙H), kamuycikah, -puhu (ラH)；《藻》ふくろ クン子レキ、カモイチカフ。|| 気形之部。(3オ：112)
- カルコ karku 【名】甥 || 甥；《方言》広く見られる語形：karku(, -hu) (北海道, ラH)；《藻》甥 カロク、カルク、イコラキ。|| 人倫之部。(1ウ：63)
- カントウ kanto 【名】天 || 天；《方言》広く見られる語形：kanto (北海道, ラH)；《藻》天 リキタ。☐ニシヨロ。|| 天地之部。(1オ：1)
- カンナカムイ kanna-kamuy 【名】雷 || (<kanna-kamuy 上方の・神) 雷神；《藻》一。☐エミル。|| 天地之部。(1オ：11)
- キマエハ kimaypa 【動2】■腹〔立腹?〕 || ※未詳；《参考》kimaypa 「(親)の命令などをきかない」(静Ok)；《藻》立腹 キマイバ、アイノセ、ク、シャンベエバレ。|| 「腹」の前部は破損により読み取り困難。(5ウ：292)
- キミタ kim ta 【位+格助】山 || (<kim 山、ta に) 山で。山に；《方言》kim は広く見られる語形。『方言辞典』では採録されていない方言もあるが、他の資料で補完することが可能であるので、北海道でもライチシカでも使用されると考えて良いだろう；《藻》山 キミタ、キモロ。|| 天地之部。(1オ：21)
- キモヌバ kimonupa 【動2】葬礼送り || (<kim-o-nupa 山・に・を掃く(nuweの複数形)) ~を葬儀で送る；《参考》kimonupa 「告別、葬る」(沙Ky), yaikimonupa 「葬儀」(Kb), yaykimonuypa 「葬式を出す」(静Ok)；《藻》一。|| (4オ：174)
- グシ kus(?) 【動2?】■寄 || ※未詳；《参考》kus/ kusu には、いくつか同音異義語があり、これが何を示すか不明であるが、前後の項目を見る限り、ここは動詞の可能性が高いと思われる：kus 「～〈場所〉を通る」(歳N)など；《藻》筈 グシ。|| 「寄」の前部は欠損。(5ウ：290)

クテン\ / kutenkuten 【?】 韃踏 || ※未詳；
《参考》韃(ふいご)を踏んでいる様子を
表現しているのかもしれない；《藻》－。
☐テンヤ\ / 。“韃踏”(ふいごふみ)
であろうか。(4オ：190)

クビリケフ kuperkep 【名】 楯(シナ) || シ
ナノキ；《参考》kuperkep は道東の言
い方で、西の方言では nipesni という：
「シナノキ」kuperkep (美, 屈斜路, 足
寄C植), kukerkep (浦河, 様似C植)；
《藻》しな コベレゲフ。|| 衣食之部。
(2ウ：81)

グミウシ kumi us 【名+動1】 かひろ [かひ
る?] || (<kumi-us かび・生える) か
びが生える。かびる；《方言》kumi us
(八, 幌, 沙, 帯, 旭, 名H), kimi koetuk
(美H), siitatuh, -k~p (ラH)；《藻》－。
|| 「ろ」ではなく「る」か。☐ウパシテ。
(5ウ：300)

クヤンカブ kuyangkap 【?】 身送 || ※未詳；
《藻》－。|| (5ウ：291)

グエカエ ku(w)ekay 【名】 十一月 ||
(<ku(w)-e-kay 仕掛け弓・の頭・が折
れる) 11月；《参考》kuekaycup 「11月」
(Kb), Kuikai-chup [kuykay-cup] 「11
月」(B)。このほかに別の月を表す語と
して、Kuyekaichup [kuyekaycup]
「12月」(B), kuwekay 「2月 (古語)」
(沙T)；《藻》十一月 クイカイチュツ
プ。☐シケウタチュフ、モニヲタチュフ、
シニウラク、チュロフ。|| 人倫之部。
(1ウ：43)

クエトツフ kuytop 【名】 雁 || ガン(雁)；《参
考》広く見られる語形。『方言辞典』で
は幌別が欠けているが『知里動物編』に
kuytop という語形をもつと記載がある：

kuytop (八, 沙, 帯, 美, 名H), kuytok
(宗H), kuytoh, -pihi(?) (ラH)；《藻》
鳶 グイト。つなき善知鳥 クイトツフ。
|| 気形之部。(3オ：113)

ケウシト kewsut, -u 【名】 伯父 || (～の)
おじ；《方言》広く見られる語形である
が、方言によって用法に違いがある。大
きくわけて aca 系と kewsut 系の2つ
があるが両系を持つ方言も多い。aca
が「父」という意味を持つ方言もあり、
より古い形であると考えられている(中
川 1996)。ライチシカは kewsut 系が
見られない代わりに haciko という語
形が確認できる。kewsut系のみ以下に
記載する：kewsut(, -u(hu)) (美, 旭H),
kewsut [雅語] (幌H), kewsut, -u
[親戚の老人] (八H), kesto (宗H)；
《藻》伯父 ケウシユツ°。☐アチャ。||
人倫之部。(1ウ：61)

ケウエダキ kewetak 【動2?】 敵打 || ※未詳；
《参考》Kewe-tak 「A fine for murder
(殺人の罰金)」(B)；《藻》－。☐ウコケ
ウエタキ。|| (3ウ：145)

ケシヨラツフ kesorap 【名】 孔雀 || 孔雀；
《参考》知里はこの語について、「神話や
伝説の中に出てくる。どこでもこれをク
ジャクのようなものを意識しており、ま
たクジャクだと断言する者もいる。北海
道にはクジャクはいなかったけれども内
地渡来の金蒔絵などから容易にそれを想
像することができたのである」(C動)
と述べている；《藻》－。|| 気形之部。
(3オ：120)

コウエン kowen 【動2】 仇(アタ)シル ||
(<ko-wen ～に対して・悪い)～に悪い
態度をとる(仇をする?) ※要検討；

- 《参考》kowen 「～をいじめる」(幌H), 「～を嫌う」(沙, 旭, 名, ラH; 歳N), 「～に悪い態度をとる」(静Ok); 《藻》ー。 || (3ウ:153)
- コ、 koko/ kok, -o 【名】 聳 || (～の) 婿; 《方言》 広く見られる語形だが、所属形の形式などに少なからず方言差が見られる: kok(, -o) (美, 名H), koko (帯H), koko, -ho (宗, ラH), kokow, -e (八, 幌, 沙H); 《藻》 姉妹の聳 ヲコマダンデ。 || 人倫之部; 「聳」は「むこ」と読む。(1ウ:64)
- コシマチ kosmat, -i 【名】 嫁 || (～の) 嫁; 《方言》 広く見られる語形: kosmat(, -i(hi)) (北海道, ラH); 《藻》 嫁ぐ アシリヒケ、コシマツ子。 || 人倫之部。(1ウ:65)
- コタン kotan 【名】 村 || 村; 《方言》 広く見られる語形: kotan (北海道, ラH); 《藻》 處 コタン。 || 天地之部。(1オ:34)
- コヘチャ kopecca 【名】 マ鴨 || マガモ(真鴨); 《参考》 「マガモ」 kopecca (屈斜路, 釧, トンナイ, タライカ, 歳C動; 八, 沙, 美, 名, ラH), kope(t)ca (幌H), kopetca (旭H); 《藻》 小鴨 コベツチャ。 || 気形之部。(3オ:116)
- コラカエキ korkayki 【接助】 然し || (<korka-iki しかし・する)～(した)が。～(した)けれど; 《参考》 通常、korka が用いられるため、korkayki は韻文や雅語の用法とされる; korkayki 「～したが。～したけれども」(N)など; 《藻》 ながら コロカイ。 || (3ウ:157)
- コリコニ korkoni 【名】 蔞(フキ) || フキ; 《参考》 korkoni 「フキ:葉柄」(北海道各地C植); 《藻》 款冬(ふぎ) コルコニ。 || 衣食之部。(2ウ:87)
- コエ koy 【名】 波 || 波; 《方言》 koy は広く見られる語形だが、沙流方言では語構成の要素としてしか用いられず、また八雲では古語とされる; 《藻》 浪 コイ。 || 天地之部。(1オ:35)
- コンル konru 【名】 氷 || 氷; 《方言》 方言差が見られる: konru (八, 幌, 沙, 帯, 美, 旭, 名H), konru(h, -pihi) [つらら] (ラH), rup (名, 宗H), rup [合成語中、雅語] (幌H), ruh, -pihi (ラH), ap [流水] (八H); 《藻》 氷 コンル。 || 天地之部。(1オ:15)
- シアシハレ siaspare 【動1】 不聞ふり || (<si-aspa-re 自分・耳が聞こえない・させる) 聞こえないふりをする; 《参考》 siaspare 「聞こえないふりをする、つんぼを装う」(幌C人) など; 《藻》 ー。 || (4ウ:232)
- シキヘヌ sikpenu 【動1】 泪下ル || (<sikpenu 涙・を持つ) 涙がでる; 《参考》 類似表現としては次のとおり: poppenu 「汗をかく」(八, 幌, 美H), kemnu 「血がでる」(八, 幌, 沙, 帯, 美, 名, 宗H); 《藻》 ー。 ☞ シキエウトカレウシ、ワカセトク。 || 支躰之部。(2オ:69)
- シキエウトカレウシ sik(p)etukareus(?) 【動1?】 泪汲 || (<sikpe-tukareus 涙・(?)) ※未詳; 《藻》 ー。 ☞ シキヘヌ、ワカセトク。 || 支躰之部; 「泪汲」は「なみだぐむ」と読む。原文に「遠近兼ル」と「両眼言」という書込あり。(2オ:68)
- シケウタチュフ sikiwtacup 【名】 四月 || (<si-kiw-ta-cup 真の/大きい・kiw・を掘る・月) 4月; 《参考》 kiw は『地名小辞典』によると「ヒメイズイの根茎」、

あるいは樺太で「オオウバユリの鱗茎」とある。また『沙流方言辞典』で kiwtacup の kiw は「ユキザサ」を指すと説明されている。地域によって植物の解釈が異なるかもしれない：「4月」 shi-kiuta chup [sikiwta-cup] (Kb), sikiutacup [sikiwtacup] (Ky), Shikiuta-chup [sikiwtacup] (B)；《藻》四月 シキウタチュップ。☐モニヲタチユフ、シニウラク、グエカエ、チュロフ。
 人倫之部。(1ウ：40)

シコロケ sikorke 【?】傍 ※未詳；《参考》アイヌ語の語形として近いものは、sikorke 「目つき」(幌C人)。和訳から推測すると、sikore 「来てくれとも言われぬのに居候みたい自分でそこにいる」(沙T) の1項動詞の形かもしれない；《藻》傍 アツテム。|| (5オ：273)
 シタラ setar 【名】杜若(カイソ) || エゾノリンゴ；《参考》setar 「エゾノリンゴ：果実」(長万部, 様似, 名, 足寄, 美C植)；《藻》杜若(かきつばた) シタウ。|| 衣食之部。(2ウ：86)

シナシケ sinasike 【?】集 ※未詳；《藻》集む ウエカリ。|| (5オ：264)

シニウラク siniorak/ (siniorap(?)) 【名】八月 || (< siniorak-cup (?)・月) 8月；《参考》「ク」は /p/ を表している可能性もあるので注意が必要である：「8月」 siniyorap (Kb), Shiniyorap-chup [siniorap-cup] (B)；《藻》八月 シニョーラプ。☐シケウタチユフ、モニヲタチユフ、グエカエ、チュロフ。|| 人倫之部。(1ウ：42)

シフシケフ sipuskep 【名】黍 || イナキビ；《参考》sipuskep 「イナキビ」(沙Ky),

「キビ」(沙T) など；《藻》粟 ムジロ、シブシケ、キテナアママ、ムリタン子。

|| 衣食之部；「きび」と読む。(2ウ：94)
 シモンテキ simontek, -e 【名】右手 || (< simon-tek-e 右の・手・所属形形成接尾辞) (～の) 右手；《方言》simon 「右の～」は広く見られる語形であるが、北千島においては「右手」を shiteki [siteki] という(Tr)：simon (北海道H), siimon, -ihi (ラH)；《藻》右手 シモイシヤム、シモンテキ。☐ハリキテケ。
 || 支躰之部。(2オ：78)

シヤ sa 【名】姉 || (～の) 姉；《方言》方言差は「兄」や「弟」に比べると幾分注意が必要であるが、基本的に北海道では sa(, -ha) や sapo という形式を使用する。名寄では hapo という語形が好まれるが、この語形が歴史的な音韻変化によるものか、「母」という語形からの補充 (suppletion) によるものかは不明。ライチシカでは nanna, -ha が用いられる (cf. 『方言辞典』)；《藻》姉 シヤー。☐ハボ、ユビ、アキ。|| 人倫之部。(1ウ：57)

シヤカンケ sakanke 【動2】茹(ユテル) || ～をゆでる；《参考》sakanke 「～をゆで干しにする」(歳N), 「～をゆでて乾す(保存食にするため)、(煮てからあと乾すもの)を煮る、ゆでる」(沙T) など；《藻》一。|| (4ウ：246)

シヤラノ sarano 【副】有躰 || (< sara-no 開く・副詞化接尾辞) 率直に、隠さずに；《参考》Sara-no 「Openly. (率直に、隠さずに)」(B)；《藻》一。☐アンカリノ。|| (4ウ：230)

シユ \ / エ sisuye 【動1】めまゑ || (< si-

suye 自分・を揺らす) めまい※要検討；
類例が見つからないが語構成としては
「自分を揺らす」で「めまい」という意
味になるだろうか；《藻》眩暈 ヌトウ
カリ。|| 支躰之部。(2オ:76)

シユクシ *sukus* 【名】日||日光；《参考》「日」
という訳語があてられているが、*sukus*
は「太陽」ではなく「日光」(歳N, etc.)
を表す；《藻》日 ベケレチュツプ。||
天地之部。(1オ:3)

シユドピシ *sutupisi* 【動1】吟味|| (< *sutu-*
pisi ~の根元・たずねる) 吟味する※
要検討；《藻》吟味 シユツウピシアン。
☞シエトウヒセレアン。|| (4オ:191)

シユマ *suma* 【名】石(大)||石；《方言》
広く見られる語形：*suma* (北海道, ラ
H)；《藻》石 シユマ。☞ホエナ、ビニ
ケウ。|| 天地之部。(1オ:29)

シユマレ *sumari* 【名】狐||キタキツネ。キ
ツネ(狐)；《方言》*cironnup* という言
い方もあるが、これは「キツネ」ばかり
をさすわけではないということも知られ
ている。なお、*sumari* を使う地域には
偏りがみられる：*sumari* (名, 宗, ラH),
sumari [“おとなしいことば”] (沙H)；
《藻》狐 チロンノプ、シユマレ、フー
レツプ。|| 気形之部。(3オ:103)

シユミチキセツフ *sumicikke cep* 【名】鱸||
スズキ(鱸)；《参考》シユミチク「すず
き」(K和)；《藻》一。|| 気形之部。(3
オ:123)

シユエンテ *siwente* 【動1】不行届|| (< *si-*
wen-te 自分・悪く・させる) のろい※
要検討；《参考》*siwente* 「のろい(鈍
い)」(八, 幌, 沙, 旭, 名H)；《藻》棄
(スタ)れる シウエンテ。☞ウチャケ

ウトモ。|| (4ウ:223)

シヨロマ *sor(o)ma* 【名】紫蕨|| ヤマドリゼ
ンマイ；《参考》「ヤマドリゼンマイ：葉」
として、*sorma* (美C植), *soroma* (シ
ラウラC植)。「クサソテツ、コゴミ：裸
葉」として、*sorma* (名, 美, 屈斜路C
植), *soroma* (シラウラC植)；《藻》紫
蕨(ぜんまい) シヨロマ。|| 衣食之部；
「蕨」ではなく「蕨」(わらび) が当てら
れている。「紫萁」(しき) であれば「蕨」
(ぜんまい) をさす。(2ウ:90)

シラムカシャケ [シラムカシャク(?)] *sira*
mkasak(?) 【?】むつとして居 || ※未
詳；《藻》むつとして居る シラホロレー。
|| 「シラホロレー」を「シラムカシャク」
に字消し、書入れしている。(5オ:279)

シリウワンテ *sir'uwante* 【動1】見合|| あた
りの様子を見てうかがう；《参考》*siru*
wante 「あたりを見回して調べる」(歳
N), 「(知らない土地で) その土地の様
子に注意して知るようにする、あたりの
様子を調べる、適当な場所をさがす」
(沙T), 「あたりをうかがう」(静Ok)；
《藻》一。☞カトウワンテ。|| (4オ:175)

シリカタ *sirka ta* 【位+格助】地|| (< *sir-ka*
地・の上, *ta* に) 地に；《参考》*sirka*
は「(モノの) 表面」を表す言葉でもあ
り、ほかに *toyka* (< *toy-ka* 土・の上)
という言葉もある(幌, 沙H)；《方言》
『方言辞典』で *sirka* が「地面」という
意味で採録されているのは八雲と沙流,
だけであるが、言い方の問題であるとも
考えられ、この他の方言でも見つかるこ
とが予想される；《藻》地 シリカ。||
天地之部。(1オ:2)

シリカトレンカエ *sir-katu-renkay(?)* 【?】

様子 || (< sir-katu-renkay 様子・の姿・の意向を述べる) ※未詳; 《参考》 katu renkayne 「なりゆきにしたがい」(沙 Ky), katu-renkai-ne 「この事態のままに由つて、ここに、事によつて、次第によつて、時によつて」(Kb); 《藻》一。
☐カトレンカエ。 || (4ウ:244)

シリコラリハ sirkorarpa 【動2】押(お)止ム || (< sir-ko-rar(i)-pa 地面・に対して・を押さえる・複数) ~を押し止める。~を押さえて止める; 《参考》 sirkorari 「~を地面に押さえつける」(歳N), sirkorarirari 「~をひどくギユウギユウ押えつける」(沙T); 《藻》押し止む
シリコラリバ。 || (4ウ:210)

シリシユムイ sirsimuy(e)/sirsimoy(e) 【動0】地震 || 地震; 《方言》方言差として、sirsimoye 系と sirsisuye 系の2つがある。後者は旭川の sissisuye(H)のみで、前者は次の通り: sirsimoye (八, 幌, 沙 H), sissimoye (美, 旭, 名H), sicimoye (宗H), sirsum (帯H); 《藻》地震 シリシユムイ。 || 天地之部。(1オ:18)

シリヒリカ sirpirka 【動0】評 || 天气がよい。晴天である; 《方言》広く見られる語形。『方言辞典』では美幌を除く北海道とライチシカで sirpirka (siri pirika (ラH)) が採録されている。なお、美幌においても『アイヌ民俗文化財調査報告書』5 (p. 106) で sirpirka の採録がある; 《藻》評 メツ、メト、子ト一。晴れる
ニシヨロヲカケアン、ウ、ラライチャリ。☐メトアン。 || 天地之部。; 「評」は「なぎ」と読む。(1オ:37)

シリヲハチウ sir'opaciw(?) 【動1?】烟り(ケムイ) || 煙たい; 《参考》 Shiri-epac

hiu [sir'epaciw] 「Full of smoke. (煙が充満している)」(B), Opachiuka [opaciwka] 「To lightly dry in smoke. (かるく燻す)」(B), opaushka [opauska] 「燻す」(Kb), opausi 「~を煙でいぶす、~を燻製にする」(歳N) など; 《藻》一。 || (4オ:199)

シリヲビノブ siri(h)opinup 【名詞+動2?】
■残り多き事(残り多き) || (< siri その地、hopinup 離れがたい) その地から離れるのを惜しむ; 《参考》 hopinup 「名残を惜しむ、離れがたい」(Kb); 《藻》残り多き ヤイシポロレ。☐エコビ。 || 「残り多き事」の前部は欠損。(3ウ:134)

シルコクシリ sur(u)kukusuri 【名】菖蒲 || (< surku-kusuri トリカブトの毒・薬) 菖蒲; 《参考》 surukukusuri 「ショオブ: 根莖」(幌, 穂別, 足寄C植; 沙, 鶴川, 歳 MJ植); 《藻》一。 || 衣食之部。(2ウ:88)

シエトウヒセレアン sutu upisire=an(?)
【名+動1+人接】吟味 || (< sutu ~の根元、u-pisi-re 互い・たずねる・させる、=an (聞き手を含む) 私たちが/人が (4人称自動詞主格)) 吟味する ※要検討; 《藻》吟味 シユツウピシアン。☐シユト°ピシ。 || 「シユトウヒシアン」(sutupis=an) の書き誤り(写し間違い) かもしれない。(5ウ:297)

シンヒロ sinpiro/ (senpiro(?)) 【名】ヒる || ノビル ※要検討; 《参考》「ノビル」はアイヌ語で mempiro, nenpiro, mempiru, mempuri などという語形で知られているが(C植)、方言形だろうか; 《藻》一。 || 衣食之部。(2ウ:92)

セリマカ sermak, -a 【名】先祖 || (~の) 先祖 ※要検討; 《参考》 sermak, -a は「守

護神」(歳N, etc.) と解釈されることが多く、北海道では「先祖」として sinrit, -i という言葉がある。ただし、『知里人間編』にタラントマリで seremax(k-a) ということが採録されている；《藻》先祖 セリマカ、セレマケ。|| 人倫之部。(1ウ:48)

ソヤ soya 【名】 蜂 || ハチ；《参考》『方言辞典』ではハチの種類によって様々な言い方が採録されており均等ではないが、『知里動物編』を見る限り広く用いられる語形と考えられる：soya (美, 名, 旭, 池田, 様似, 歳, 沙, 穂別, 白老, 礼文C動, 八, 帯H)；《藻》蜂 ショーヤ。|| 気形之部。(3オ:108)

ソヨマシケ soymaske 【名】 大魚 || ボラ※要検討；《参考》soymaske 「ボラ」(長, 虻, 幌C動)；《藻》一。|| (3オ:126)

タンモシリヘベンケ ヲロワフシユセコエチユ子イハクノカ tan mosir hepenki orwa hususekoycu(?) ney pakno ka 【一】 此世の初より来世末代迄 || (< tan この、mosir 世、hepenki 始まり、orwa より、hususekoycu(?), ney いつ、pakno まで ka も) この世の始まりから??いつまでも※要検討；《参考》Hepenki 「To rear. To bring up. Also “source”；“origin.” (成長する、起源、始まり)」(B；《藻》一。|| (4オ:170)

タンエタク ヌカラ シユウンケイタク タバナ tan itak nukar sunke itak tapan na 【一】 - || (< tan この、itak 言葉、nukar を見る、sunke 嘘、itak 言葉、tapan です、na よ) この言葉を見て、空言を申します；《参考》語彙部分の最後、テキストの導入部に挿入されている

一文である。tan itak 「この言葉」というのは、語彙部分を指しており、sunke itak 「空言」というのはテキスト部分を示す；《藻》一。|| この後の11丁から始まる「シマコ(ク)ライヤ」という詩に関連している一文。(5ウ:301)

チウリフ ciwrip 【名】 蕷 || 山芋。自然薯(じねんじょ)；《参考》Chiurip [ciwrip] 「Dioscorea japonica, Thunb. (山芋、自然薯)」(B)；《藻》長芋 コサ、ヲルコツイベ、チウリフ。|| 衣食之部。(2ウ:89)

チタルヘ [チクルヘ (?)] cikurpe 【名】 蓬 (ユムキ) || エゾヨモギ；《参考》知里は「おそらく chikurpe [chi (我ら) kur (當てる) pe (もの)] で、葉をもんで傷口に當てて血を止めた土俗にもとずいた名であろう」(C植) と分析している；《藻》蓬 ノヤ、メヤ、チクルベ。☐ノヤ。|| 衣食之部；「チタルヘ」に見えるが、もしかすると「チクルヘ」かもしれない。(2ウ:84)

チユフ cup 【名】 月 || 月；《参考》cup は、「太陽」や「月」にあたる語として使用される；《方言》広く見られる語形：cup (北海道H), cuh (ラH)；《藻》月 クン子チユツフ、アンチカラチユツフ。|| 天地之部。(1オ:4)

チユロフ curup 【名】 十二月 || 12月；《参考》「12月」curup (沙T), ciwrip (沙Ky), Churup-chup [curup-cup] (B)；《藻》十二月 チウルプ。☐シケウタチユフ、モニヲタチユフ、シニウラク、グエカエ。|| 人倫之部。(1ウ:44)

テシヤウ tese aw/ (teskao(?)) 【動2?】 網ム || ~を編む (?) ※未詳；《参考》tesk

ao 「棒状のものをばらばらにならないように紐でつなぎあわせる」(歳N), 「…を編む」(沙T); 《藻》 綴る テシカラ。編む ヲシケ。 || (5オ:257)

テタチリ *teta(t)cir/ (reta(t)cir(?))* 【名】白鳥 || ハクチョウ(白鳥); 《参考》「テ」は /re/ を表している可能性がある: 「白鳥」retatcir (穂別, 浦河, 釧路, 屈斜路C動; 八H), retacir (旭, 屈斜路C動), Retara chiri (retara ciri) (千Tr); 《藻》 白鳥 テタチリ、レタチリ。☐ヘケレチカフ。 || 気形之部。(3オ:114)

テヲロクシ *teor kus* 【名+動2】側通ル || (<teor ここ、kus を通る) ここを通る; 《藻》-。 || (3ウ:148)

テンヤ\ / tenyatenya 【?】鞆踏 || ※未詳; 《参考》鞆(ふいご)を踏んでいる様子を表現しているのかもしれない。☐クテン\ /。 || 「鞆踏」(ふいごふみ)であろうか; 《藻》-。(4オ:189)

トマムカシ *tomam kasi* 【名+位】■源 || (<tomam 沼地、kasi の上) 沼地。湿原; 《参考》tomam 「湿地、沼沢地」(沙T), tomam, -i 「湿地、泥炭地、沼地。—これにヨシの生えたのを sar と云う」(C地名); 《藻》-。 || 天地之部; 「源」の前部は欠損。(1オ:38)

トモコキアエノ (トムウクアエノ) *tomokokiaynu* 【連動】■御聞 || ~に忠実に従う; 《参考》tom(o)kokanu 「~に忠実に従う」(沙T) など; 《藻》 重んず イトモコケアイヌ、アイノコル。 || 「御聞」の前部は欠損。(5オ:285)

トモヲシマ *tom,-o osma* 【連動】物つきゐル || (<tom(-,o)-osma ~の胴中・に突っ

込む) ~にぶつかる ※要検討; 《参考》tom, -o osma 「~にぶつかる、~にたまたま行き当たる」(歳N) など; 《藻》-。 || (4オ:180)

トレシ *tures, -i* 【名】妹 || (兄からみた) (~の) 妹; 《参考》アイヌ語は男性と女性で「妹」の言い方が異なる; 《方言》北海道の多くの方言で *tures*(, -i(hi)) という語形を採用しているのに対し、幌別と沙流では *matapa*(, -ha) という特殊な語形を持っている。ライチシカでは *heekopo*, -ho (cf. 『方言辞典』); 《藻》 妹 ツレシ、クツレシポ。☐女アキ。 || 人倫之部。(1ウ:58)

トエチヌエバ *tuyecinoypa* 【動1】腹痛 || (<tuye-ci-noy(e)-pa 腸・中相・ねじる・複数) 腹痛; 《参考》「腹がねじれるように痛む」 *tuye-chinoypa* [tuye-cinoypa] (シラウラC人), *tuyhe-chinoypa* [tuyhe-cinoypa] (ウシロC人); 《藻》-。 || 支躰之部。(2オ:74)

ナイ *nay* 【名】谷 || 沢。谷川; 《方言》 広く見られる語形: *nay* (北海道, ラH); 《藻》 沢 ナイ。 || 天地之部。(1オ:22)

ナキ子 *ne yakne(?)* 【動2+接助】■ [扱?] || (<ne である、yakne ならば) ~であるならば; 《藻》 扱 ナキ子。 || 和語見出しは欠損。(5ウ:287)

ニシ *nis* 【名】雲 || 雲; 《方言》「雲」を表す語形には、ほかに *niskur* や *urar* などがある: *nis* (沙, 帯, 美, 旭, 名H); 《藻》 雲 ニシ。☐ウラリ、ニシ。 || 天地之部。(1オ:10)

ニシヨロ *nisor(o)* 【名】雲 || (<nis-or(o)雲・の中) 天。空; 《方言》 広く見られる語形: *nis(or(o))* (北海道H), *nisoro* (老人語)

- (ラH);《藻》雲 ニシ。☐カントウ、ニシヨロ。||天地之部。(1オ:17)
- ニタイ nup nitay-nup【名+名】/【名】野(林原)||(<nitay-nup 林・原) 林(原);《参考》nitay も nup も共に北海道で広く見られる語形であるが、いずれも単独で用いられる。これを複合語として使用している例としては、nup nitay (旭H)がある;《藻》野 nupカ。樹の茂生 ニタイ。||天地之部。(1オ:39)
- ニトキトキ nitoktoki【名】鴛||クマゲラ※要検討;《参考》何の鳥を表しているかは不明だが、アイヌ語から判断するにクマゲラであろうか。ciptacikap や ciptacir などという方言もある:nitoktoki (屈斜路C動), nitoktoki-cikax [nitohtokicikah] (トンナイ, タライカC動);《藻》てらつゝき イシヨキシヨキ。||気形之部;「列鳥」で一語のように書かれている。(3オ:109)
- ニヌ nino【名】のな||ムラサキウニ(日本語方言:「ノナ」);《参考》nino「うに」(礼文C動),「ムラサキウニ」(幌C動;沙Ky),「ウニの類(とくにバフンウニ)」(様似C動);《藻》海膽 ニノ、アシユンテ。||気形之部。(3オ:128)
- ニム nimu【動1】登|| (木に)登る;《参考》nimu「木にのぼる」(歳N),「木登りする」(沙T)など;《藻》登 マカン、マカホンラウ。|| (5オ:276)
- ニムマメ nimumame(?)/ninumame(?【名】小豆|| (<ninu-mame~を縫う・豆) ササゲ(?)※要検討;《藻》小豆 アンヅキ。||衣食之部。(2ウ:96)
- ニレ [ニン(?)] nire/(nin(?))【動?】消|| 消える、減る※要検討;《参考》nin 「減る。(消費して減ることではなく、それ自身縮んで小さく/かさが少なくなることを言う。野菜、雪、水、月などについて言う。)(沙T)など;《方言》nin は多くの方言で採録されている:「減る」nin (八, 沙, 帯, 美, 旭, 名, 宗H), konin (ラH);《藻》消ゆる ニン。|| 「レ」に見えるが「ン」であろうか。(5オ:286)
- ヌイナ nuyna【動2】隠||~を隠す;《方言》nuyna「隠す」(八, 幌, 沙, 帯, 名, 宗, ラH);《藻》隠くす ヌイナ。|| (5オ:262)
- ノチウン nociun(?)【動1?】急死||※未詳;《藻》一。|| (2オ:67)
- ノヤ noya【名】蓬(ユムキ)||エゾヨモギ;《参考》noya「エゾヨモギ」(北海道, 樺太C人);《藻》蓬 ノヤ、メヤ、チクルベ。☐チタルへ [チクルへ(?)]. ||衣食之部。(2ウ:83)
- ハウトルカル hawturkar【動1?】中ニ立|| (<haw-utur-kar 声・の間・をつくる) 仲立ちする※要検討;《参考》類似の例としては次の通り:haturun-kur「仲介の労をとる、ちゆうさい人、仲にたつて話をとめる人」(Kb);《藻》一。|| (4ウ:242)
- ハボ hapo【名】母||母;《方言》「母」を表す語形は方言差が大きいため、同系の語形のみとりあげる:hapo (八, 幌, 沙, 帯, 美, 宗H);《藻》母 ハボ。☐ラン子キ。||人倫之部。(1ウ:52)
- ハヤエ hayaye(?)【?】■■ふとす||※未詳;《藻》一。||「ふとす」の前は欠損。(4ウ:211)
- バラキ paraki【名】ダニ||ダニ;《方言》

- paraki (八, 幌, 沙, 美, 名, 宗, ラH), yukki (沙, 帯, 旭H); 《藻》だに バラキ。|| 気形之部。(3オ:107)
- ハリキテケ har(i)kitek, -e 【名】左手 || (< har)(i)ki-tek-e 左の・手・所属形形成接尾辞) (～の) 左手; 《方言》「左の～」harke (八H), harki (幌, 沙, 帯, 美, 旭, 名H), hariki (宗, ラH); 《藻》左手 ハリキイシヤム、ハリキテキ。☞ シモンテキ。|| 支軀之部。(2オ:77)
- バルホゲグシ parpoki kus 【位+動2】風下 通ル || (< parpoki 風下(長形)、kus を通る) ～の風下を通る; 《参考》parpok, -i-ke 「風下」(歳N); 《藻》-。☞ マウカグシ。|| (3ウ:147)
- ハエカエ payekay 【動1】往来 || 往来する; 《参考》payekay 「旅をする」(幌H), payeka(y) 「歩き回る」(歳N), payekai 「行き来」(Kb); 《藻》往来 バイカイ。|| (5オ:277)
- ビニケウ pin(i)kew 【名】石(ヂヤリ) || 砂利; 《方言》類似語が採録されている地域は限られている: pikew (幌, 宗H), piikun, -ihi (ラH); 《藻》石 シユマ、(大なるハ) ヒツケ、(中なるハ) ポイナ、(小なるハ) ヒニケウ。☞ シユマ、ホエナ。|| 天地之部。(1オ:31)
- ビヤバ piyapa 【名】稗 || 稗; 《参考》piyapa 「ひえ(稗)」(幌, 沙, 美H); 《藻》稗 アイラシアマム、ツナシアマム、ビヤバ。|| 衣食之部。(2ウ:95)
- ビンニ pinni 【名】タモ木 || ヤチダモ; 《参考》『知里植物編』でこの木について様々な語源解釈が試みられているが、はっきりしない; 《藻》たも ビンニ。|| 衣食之部。(2ウ:80)
- ビンノホ pinotpo(?) 【副】内々一人 || ひそかに ※要検討; 《参考》Pinotpo 「By stealth. (ひそかに)」(B); 《藻》-。☞ ヤエキマエ。|| (4ウ:215)
- フシユルアシテ husuraste/(asuraste(?)) 【動2】噂 || (< asur-as-te 噂・立つ・させる) 噂を～に響かせる ※要検討; 《参考》asuras や siasuraste という語形の採録はあるが、asuraste については不明; 《藻》-。|| 「フ」は「ア」の誤りかもしれない。(3ウ:154)
- フチ huci 【名】祖母 || 祖母; 《方言》北海道で広く見られる語形: huci (幌, 沙, 帯, 美, 旭, 名, 宗H), hutci (八H), ahci, -hi (ラH); 《藻》祖母 シユチ。|| 人倫之部。(1ウ:54)
- ブルブルケ purpurke 【動1】津波(ツمام) || (< pur-pur-ke 擬音や擬態を表す語根・重複・自動詞化接尾辞) (水が) ぶくぶく湧き出る; 《参考》purpurke は本来「水が湧き出る」(歳N, etc.) という意味であって、津波を表すのは orepunpe (歳N, etc.) などがよく知られている; 《藻》津波山 / 〱 ミ ヲハコベ。|| 天地之部。(1オ:20)
- ブエ puy, -e 【名】穴 || (～の) 穴; 《参考》puy は自然に空いている穴のことを表すようであり、これに対して人工的な穴を suy と呼ぶことがある; 《方言》『方言辞典』には puy が単独で採録されていないこともあるが、「鼻孔」や「肛門」などの複合語を含めると北海道とライチシカで広く見られる; 《藻》-。|| 天地之部。(1オ:24)
- フンベエトロ humpeetor 【名】海月 || (< humpe-etor クジラ・鼻水) クラゲ

(海月)；《参考》「海月」を採録している地域は少なく、『方言辞典』では美幌で hunpeetor と確認できるほか、八雲で tonru、ライチシカで ruhtenta などが採録されているのみである。『知里動物編』では humpeetor (美, 屈斜路, フブシナイ, 阿寒, 様似C動)とある；《藻》海月 フンベイトリ。|| 気形之部。(3オ:129)

ペウリキナ pewrekina 【名】紫 || (< pewrekina 若い・草) ムラサキグサ；《参考》Peure-kina [pewre-kina] 「Lithospermum Erythrorhizon (ムラサキ)」(B), 「「ペウレ」が根で、「ペウレキナ」はその地上部たる莖葉をさす」(C植)；《藻》一。|| 衣食之部。(2ウ:98)

ヘケレチカフ pekercikap 【名】白鳥 || ハクチョウ(白鳥)；《参考》pekercikap 「白鳥」(幌C動；沙H)；《藻》白鳥 デタチリ、レタチリ。☐テタチリ。|| 気形之部。(3オ:115)

ヘチャク petcak/(petcaewak?) 【名】鷺 || サギ(鷺)；《参考》petcaewak 「アオサギ」(美, 屈斜路, 釧路C動)；《藻》鷺 ベツチヨー、ベツチヤイワク。|| 気形之部。(3オ:122)

ベツ pet 【名】川 || 川；《方言》広く見られる語形：pet (北海道H), peh [神謡] (ラH)；《藻》川 ベツ。|| 天地之部。(1オ:28)

ホイヌ hoynu/ hoinu 【名】狢 || エゾテン。テン(貂)；《参考》語頭の h が落ちる場合があるが、広く見られる語形のようにある。北海道では「エゾテン」、樺太では「カラフトクロテン」をさす：hoinu (幌, 穂別, 様似, ニイトイ, タライカC

動), hoynu (礼文, 歳, 旭, シラウラC動), oinu (美, 屈斜路, 足寄C動)；《藻》てんの如く小なる ホイヌ。てんの如く耳ながし ツシユニケ。|| 気形之部。(3オ:102)

ホス、ゼ hosususe/(hosmise(?)) 【?】繁昌 || ※未詳；《藻》繁昌 ヤイコルベヲアンカ。|| (4オ:185)

ホセカムイ wosekamuy 【名】狼 || (< wosekamuy ウォーと吠える・神) オオカミ(狼)；《参考》wosekamuy (宗H, オチホC動), woosekamuy [老人語] (ラH)。知里は「「…(中略)…wose-kamuy はオオカミではなくてヤマイヌだ」と主張する老人たちが、シラオイやホロベツには多い」(C動)とも報告している；《藻》狼 ヲセカモイ。|| 気形之部。(3オ:106)

ホマルノボ homarnopo 【副】遙 || (< homarnopo かすか・に・指小辞) かすかに；《方言》「ぼんやり」homarno (八H), homanno (沙H), omarno, omanno (名H), homaraano (ラH)；《藻》遙かホマルノボ、ホマンノ。☐ホマンノボ [ヲマンノボ]。|| (5オ:252)

ホマンノボ [ヲマンノボ] (h)omannopo 【副】遙 || (< (h)omar-no-po かすか・に・指小辞) 遙か遠くに；《参考》Oman-no-po 「Distant. Far. Afar. (遠くに、遙かかなたに)」(B)；《藻》遙かホマルノボ、ホマンノ。☐ホマルノボ。|| 「ホ」を字消し、「ヲ」と書入れしているように見える。(5オ:251)

ホルントカ horuntuka(?) 【名】鱧 || ワラヅカ (日本語方言：ハモ) ※要検討；《参考》warantuka 「ハモ」(沙Ky) のこ

とであろうか；《藻》かず ワランヅカ。
 || 気形之部；「ト」が読みにくい。(3オ：
 125)

ホエナ poyna 【名】石(小) || 小石※要検討；
 《参考》poyna という語形は採録が少な
 く、『地名小辞典』において美幌で「石」
 の雅語として採録されている。また、北
 千島でも poina [poyna] が「石」という
 意味で採録されている(鳥居1903；
 Dybowski 1892)。「小石」には poysuma
 や nokansuma という語彙を用いる地
 域が多く、採録された経緯を考える必要
 がある。☞ シユマ、ピニケウ；《藻》石
 シユマ、(大なるハ) ヒツケ、(中なる
 ハ) ポイナ、(小なるハ) ヒニケウ。
 || 天地之部。(1オ：30)

マイ子 mayne(?) / mawne(?) 【動1?】とふ
 して || ※未詳；《参考》mayne 「ばかだ」
 (沙T), mawne 「交わる」(沙Ky)；《藻》-。
 || (5オ：267)

マウカグシ mawka kus 【位+動2】風上通
 ル || (< maw-ka 風・の上、kus を通る)
 ~の風上を通る；《藻》-。☞ バルホゲ
 グシ。 || (3ウ：146)

マウサク mawsak / (mawsok(?)) 【動1】叱
 [呔(?)] || ①(< maw-sak 息/風・無い)
 災難なく、② (< maw-sok 息・(?)) あ
 くび※要検討；《参考》maw-sak で、
 「疫疾にかかはらず、災難なく、恙(つ
 つが)なく、病気にかからず」(Kb) と
 いう意味である。一方、もうひとつの解
 釈である mawsok は「あくび」(T)を
 意味する；《藻》醒 マウシク。 || 支躰
 之部；「叱」ではなく「呔(あくび)か
 もしれない。(2オ：75)

マコライ makoraye 【動2】巻上ル ||

(< mak-o-raye 奥・に・をやる) ~を
 巻き上げる；《参考》makoraye 「後ろ
 へやる、(袖を)まくる」(沙T)；《藻》-。
 || (5オ：283)

女アキ [マッ・アキ(?)] matak, -i 【名】妹
 || (< mat-ak 女・弟)(姉からみた)妹；
 《参考》「女」という漢字を用いて、アイ
 ヌ語の mat マッ「女」と読ませようと
 しているようであり、ここでは matak,
 -i という語形として捉えておく；《方言》
 matak(, -i(hi)) は北海道で広く見ら
 れる語形。『方言辞典』には旭川のみ記
 載がないが、『アイヌ民俗文化財調査報
 告書』1 (p. 56)などで確認されてい
 る；《藻》妹 ヅレシ クツレシポ。☞
 トレシ。 || 人倫之部。(1ウ：59)

ミチ mici 【名】父 || 父；《方言》「父」を表す
 語形は方言差が大きいため、同系の語形
 のみとりあげる：mici(, -hi)(幌, 沙,
 帯, 美H)；《藻》父 ハンベ、ミチ、アチ
 ヤ。☞ アチヤ。 || 人倫之部。(1ウ：49)

ムレルヲロ muriror 【?】膝折 || ※未詳；
 《藻》-。 || (4オ：173)

ムンチロアマ、 munciro-amam 【名】餅
 (モツ) 粟 || (< munciro-amam 粟・穀
 物) 粟；《参考》munciro 「あわ(粟)」
 (八, 幌, 沙, 帯H)；《藻》粟 ムジロ、
 シプシケ、キテナアママ、ムリタン子。
 || 衣食之部。(2ウ：93)

メアン mean 【動0】寒 || (< me-an 寒さ・
 ある) 寒い；《方言》広く見られる語形：
 mean (北海道, ラH)；《藻》寒 メイ。
 ☞ メノエ。 || 人倫之部。(1ウ：46)

メトアン [ノトアン(?)] meto-an / (noto-
 an(?)) 【名+動1】/【動0】沓 || 凧(な)
 ぐ。凧いでいる；《参考》『方言辞典』に

- noto an (沙H) という記載がある。；
《方言》採録地域に偏りが見られるもの、もっと広く使用されている可能性もある：neto (八H), noto (幌, 沙H), noto(?) (名H)；《藻》 平 メツ、メト、子トー。☐シリヒリカ。|| 天地之部；「平」は「なぎ」と読む。「メトアン」の「メ」は「ノ」かもしれない。(1オ：36)
- メノエ menoye 【動1】寒 || (<me-noye 寒さ・をねじる) (人が) 寒いと感じる；《方言》方言差があり、menoye は美幌(田)で使用される。ほかに、meun (八, 帯H), merayke (八, 幌, 沙, 旭, 名H), meerayki (ラH) などがある。なお、宗谷でも merayke が「わき国”のこことば”(H)として採録されている；《藻》寒 メイ。☐メアン。|| 人倫之部。(1ウ：45)
- メマンカ memanka 【動2?】涼 || (<memanka 涼しい・使役接尾辞) (人が) ~を涼しいと感じる※要検討；《方言》多くの方言で meman が「(人が) 涼しいと感じる」、sirmeman が「(気温が) 涼しい」という意味であると考えられている。報告されている形で最も近いものは、yaymemanka (宗H) であり、「涼む(?)」と書かれている；《藻》-。|| 人倫之部。(1ウ：47)
- モトトリチカフ mototoricikap 【名】アイサ鴨 || (<motontori-cikap 髻・鳥) ウミアイサ (鴨の一種)；《参考》ウミアイサは雄雌ともに冠羽を持つカモ科の鳥であり、これが髻に見えたことからつけられた名前かもしれない：Emontori-ushchikap [emontori-us-cikap] 「ウミアイサ」(B)；《藻》-。|| 気形之部。(3オ：117)
- モニヲタチュフ moniotacup/(moniorapcup (?)) 【名】七月 || (<moniota-cup (?)・月) 7月；《参考》「タ」は /ra/ を表している可能性があるので注意が必要：「7月」moniyorapcup (Ky), Moniorapchup [moniorap-cup] (B)；《藻》七月 モニヨウラプ。☐シケウタチュフ、シニウラク、グエカエ、チュロフ。|| 人倫之部。(1ウ：41)
- モマ moma 【名】季 || スモモ；《参考》知里の説明は次のとおり：「植物名詳表に Momani (スモモ) とあり、採集地は「沙流・千歳・石狩」となっている。辞書では Moma-ni (スモモの木) となっている。Moma はスモモのモモで果実をさし、その果実の生ずる木の意味で Moma-ni (スモモの・木) と云ったのであろう」(C植)；《藻》-。|| 衣食之部。(2ウ：82)
- モリキラエ (ホリキラエ) horikiraye 【動1】袋巻上る || (<ho-riki-raye 尻・の上のほう・にやる) 巻き上げる。たくし上げる；《参考》orikiraye 「たくし上げる」(沙Ky), horikiraye 「(着物の裾を) たくし上げる：川を歩いて渡る時に裾をたくし上げる様子」(沙Ky) など；《藻》-。|| (5オ：284)
- ヤイバルヲシリベ [ヤイバルヲシリケ (?)] yayparoosiripe(?) 【動1】口過 || (<yay-paro-osiripe 自分・の口・(?)) 無意味なことを言う；《参考》Yaiparoshiribe [yayparoosiripe] 「A person who talks nonsense. (無意味なことを言う人)」(B)；《藻》口過 ヤイハルヲシリベ。|| 「ヤイバルヲシリベ」の「リ

べ」は字消しされ、「ケ」と書入れがあるように見える。(4オ:181)

ヤイフリアン yaypurianu(?)【動1】丁寧||
(<yay-puri-anu 自分・態度・を置く)
慎んで丁寧に行動する※要検討;《参考》
yaipuri-anu「忌む、畏れて避ける」(Kb);
《藻》一。☐ヤイフリラム。|| (3ウ:
152)

ヤイフリラム yaypuriramu(?)【動1?】卑
怯|| (yay-puri-ramu 自分・態度・を思
う) ※未詳;《参考》近い語形としては、
yaipuri-anu「忌む、畏れて避ける」(Kb);
《藻》一。☐ヤイフリアン。|| (4ウ:212)

ヤウンチシテ yayciste(?)【動1】■サセル
|| ※;《参考》yayciste「悲しむ」(八H),
「一人で泣く」(静Ok), Yaichishte
[yayciste]「To mourn for the dead.
To bewail the dead. (哀悼する)」(B);
《藻》一。|| 「サセル」の前の字は「懲」
に似ているが不明。(5オ:249)

ヤツタシヤ yattasa【動1】/【名】返礼||返
礼(する);《参考》yattasa「返礼」
(Kb), yayattasa「返礼をする, お返し
をする」(歳N);《藻》謝礼 ヤイレ
ンカタシヤ、ヤイアツタシヤ。|| (5ウ:
293)

ヤベカ ya peka【名+格助】岡(阜)|| (<ya
陸、peka を通って) 陸を(通って);《方
言》ya は『方言辞典』で名寄を除く北海
道全域、およびライチシカで確認できる;
《藻》岡 ヤ、ヤタ。丘陵 ヤベカ。||
天地之部。(1オ:25)

ヤ、シ、 yayasis【動1】くち惜イ||口惜し
い;《参考》yayasis「やらなければよ
かった、ばかりしいと後悔する」(歳N),
「後悔する」(沙Ky),「口惜しい、心か

ら悼む、口惜しがる」(Kb) など;《藻》
悔む イヨボシバ、ヤ、シ、。|| (4オ:
198)

ヤンベ yayan pe【動1+形名】貧||
(<yayan 普通の、peもの) 普通の人※
要検討;《参考》yayan「普通の」(歳N),
「ただの、ふつうの、まじりものがない」
(沙T) など;《藻》軽薄 ヤ、ン、コシ
子。|| (4ウ:231)

ヤヨチバレ yayocipare(?)【動1?】変死||
(<yay-ocipare 自ら・(?)) 変死する※
要検討;《参考》Ociubare [ociwpare]
で、「v.i. To die. (死ぬ)」(B)とあるが、
もしこれが1項動詞なら、接頭辞の
yay-をつけると0項動詞となってしまう。
もしかすると、Yaiochishbare
[yayocipare]「v.i. To grieve over
having suffered loss. (喪失によって
深く悲しむ)」(B)という語形に關係して
いるかもしれない;《藻》労(イタハ)し
い イヨチシバ。|| 支躰之部。(2オ:66)

ヤヨヲロカレ yayorkare(?)【?】■ ■ ※
未詳;《藻》没落(おちぶれる) ヤヨヲ
ロカレ。|| 和語見出しは解読困難。(4
ウ:241)

ヤワシ [ヤワシノ] wayas(no) / wayas(nu)
【動1】賢イ||賢い;《参考》wayash
[wayas]「賢明なる、知恵のある」
(Kb), wayasnu「口が達者だ」(沙T),
「りこうな」wayasno (八H), wayasnu
(幌H);《藻》賢い ヤワシノ。|| 印刷
の問題で、「ヤワシ」の後に「ノ」があ
るかどうかは明確ではない。(5オ:278)

ヤエカムレ yaykamure【動2】重ル||
(<yay-kamure 自分・に~をかぶせる)
~を重ねる※要検討;《参考》kamure

「～に～をかぶせる」(沙T) など;《藻》一。
 || (4ウ:226)

ヤエキマエ yaykimaye 【動1】内々一人 ||
 (<yay-kimaye 自ら・言うことを聞
 かない (単数形?)) ※未詳;《参考》
 yaykimaypa 「不孝である」の単数形で
 であろうか。ikimaypa 「[親など] の言う
 ことを聞かない」(静Ok);《藻》不孝も
 の ヤイキマイバ。乖く ヤイキマイバ。
 ☞ビンノホ。 || (4ウ:216)

ヤエキマエハ yaykimaypa 【動1】不孝 ||
 (<yay-kimaypa 自ら・言うことを聞
 かない) 不孝である;《参考》ikimaypa
 【動1】「[親など] の言うことを聞か
 ない」(静Ok);《藻》不孝もの ヤイキマ
 イバ。乖く ヤイキマイバ。☞ウキマエ
 バ。 || 支躰之部。(2オ:71)

ヤエククエ [ヤエクエ (?)] yaykuye(?) 【?】
 金■ || ※未詳;《藻》一。 || 「金」の後
 にある字は解読困難。(4ウ:234)

ヤエコサク √(ヤイカラサク √)
 yaykosaksak 【動1】つくのゑ出しめル
 || (<yay-ko-sak-sak 自分・に対して・
 無くなる・重複) 償いをする。自らを不
 満に思う ※要検討;《参考》Ikosaksak
 「To be dissatisfied with (～について
 不満に思う)」(B);《藻》一。 || 「エ」を
 「イ」に、「コ」を「カラ」に修正してい
 るように見える。(3ウ:140)

ヤエコベケレ yaykopeker 【動1】思ふ ||
 (<yay-ko-peker 自分・に対して・明るい) 考
 える。思う;《方言》「考える」yaykopekere
 (旭H), yaykouwepeker (八, 沙, H),
 eyaykouwepeker (名H), ukopepeker
 (宗), yaykopepeker (帯, 宗H), yaykou-
 pepeker (美H), yaykoukopepeker

(宗H);《藻》思ふ イクイラ、ヤイラ
 ムシカルンカ。 || (3ウ:156)

ヤエコヤカルバ yaykoyakarpa/
 (yaykoyukarpa(?)) 【動1】念頃ニ申事
 || (<yay-ko-yukar-pa 自分・で・物語
 を語る・複数) ひとりで物語を語る ※要
 検討;《参考》『方言辞典』に yaykoyukar
 で「歌」(旭) とあり、「淋しい時一人で
 やるはなうたのようなもの」であるとい
 う。語構成からすると、歌謡というより
 は節つきの物語を一人で歌うということ
 なのであろう;《藻》一。 || (3ウ:136)

ヤエシヤンヘシケレ yaysampesitkire(?) 【動
 1?】心強 || (<yay-sampe-sitki-re 自
 ら・心・もつれる・させる) ※未詳;
 《参考》sampesitki 「痛心する、難渋す
 る」(旭C人), iramsitkire 「人を苦しま
 せる」(静Ok);《藻》あきれる シヤン
 ベシツキ。 || (4オ:186)

ヤエハウッチンテ yaypautcinte/(yaypawcire
 (?)) 【動1?】 ■■ || ※要検討;《参考》
 Yaipauchire [yaypawcire] 「To poison
 one's self. (自ら毒を仰ぐ)」(B);《藻》一。
 || 和語見出しは欠損。(4ウ:208)

ヤエボロシヤク yayporsak 【動1】赤面 ||
 (<yay-ipor-sak 自分・顔色・無い) 赤
 面する;《参考》「恥ずかしがる、恥ずか
 しい」 yayporsak (八H), yayiporosak
 (沙H), eyayiporowen (美H);《藻》赤
 面 又恥也 ヤイシトマ。 || (4オ:177)

ヤエラフ yayyerap 【動1】訴 || 訴える ※要
 検討;《参考》 yayyerap 「災難に会って
 苦労したことを話す」(沙T);《藻》演舌
 ヤイラフ、マヅク、ドウ。 || (4ウ:
 243)

ヤエラマツテ yayramatte 【動1】用心 ||

(< yay-ram-at-te 自分・心・掛かる・させる) 用心する。注意深くいる；《参考》 yayramatte 「精神を統一する、注意深い、気持を落ち着けておかないように歩くこと」(沙Ky), Yairamatte [yayramatte] 「To be careful. To watch over one's self. To be circumspect. To be cautious. To pay attention. (用心深い、慎重である)」(B)；《藻》 用心 ヤイラマツテ。 || (5ウ：296)

ヤエラムウンノ yayramunno(?) 【?】 心拭 || 払拭する。忘れる※要検討；《参考》 語形は yayramunno 「いつも、しょっちゅう」(美H) に近いが、意味は Ramuunun 「To be inattentive. To forget. (不注意である、忘れる)」(B) と関係しているように考えられる；《藻》 -。 || (4ウ：227)

ヤエラムコシバレ yayramkuspare 【動2】 心当 || (< yay-ram-kus-pa-re 自分・心・～を通す・複数・させる) ～に思いを馳せる※要検討；《参考》 「自分の心を～に通す」という語構成になっているが、意味は判然としない。語構成が類似するものを以下に載せる。①目を～に通す：sikkuspare 「～を眺めわたす、～を見回す」(歳N)。②手を～に通す：tekkuspare 「～に手を通す、～に手を差し入れる」(歳N)。③音を～に通す：humkuspare 「～に音を鳴り響かせる」(沙T)；《藻》 心當 イシコバ、チシコバ。 || (4ウ：228)

ユウカルシ yukkarus(?) 【名】 舞茸 || (< yuk-karus 鹿/熊・キノコ) 舞茸；《参考》 yukkarus 「マイタケ」(北海道

各地C植)；《藻》 茸 カルシ、カツパラ。 || 衣食之部。(2ウ：97)

ユウタラレヲマンテ yutar e=omante(?) 【名? +人接+動2】 誰ぞきふてやれ || (< yutar 伝言、e=あなたが(2人称単数主格)、oman-te 行く・させる) 伝言をやりなさい；《参考》 yutar 伝言する」(沙Ky), 「人を使ふ、人を使って伝言せしむ、伝言す」(Kb)；《藻》 -。□ウエテクトモ。 || (5オ：255)

ユク yuk 【名】 鹿 || シカ(鹿)；《方言》 広く見られる語形：yuk (北海道H), yuh, -pihi (ラH)；《藻》 鹿 ユーク。 || 気形之部。(3オ：105)

ユクチカフ yukcikap 【名】 ヲシリ || (< yuk-cikap 鹿/熊・鳥) フクロウ；《参考》 yukcikap については、次のような記述がある：「ふくろう」(歳N), 「コミミズク(?)、ふくろう(?)」(沙T), 「The screech owl (コノハズクやメンフクロウ等の鳴き声の荒々しい梟の一種)」(B)；《藻》 ふくろ クン子レキ、カモイチカフ。 || 気形之部。(3オ：110)

ユビ yup, -i 【名】 兄 || (～の) 兄；《方言》 文法形式による使い分けは見られるものの、語形そのものの方言差は大きくない。北海道とライチシカに見られる語形：yup, yupi, yupo, yuppo などという形式がある (cf. 『方言辞典』)；《藻》 兄 ユービ。 || 人倫之部。(1ウ：55)

ヨマツバレ omatpare 【動?】 不聞■ || ※未詳；《参考》 類似する語としては次のとおり：homatpare 「狼狽する」(Kb)；《藻》 -。 || 「不聞」の次の字は解読困難。(5オ：282)

ラ ヲ／＼ rara/ (raye(?)) 【動2?】 上 || ～を

献呈する※要検討；《参考》rara には「見下げる」(八, 沙, 旭, 名H) という意味しかない。raye に「To offer up. To give to a superior. (～を献呈する)」(B) という意味があるようだが、これであらうか；《藻》一。|| 「上」で「奉る」という意味。(5オ：274)

ライメツキ raymek ki 【動1】戴ク || (< raymek 御礼の挨拶、ki をする) (ものをもらって) 御礼の挨拶をする；《参考》「お辞儀する」raymek (幌H), raimek (名H), raymik (沙H), raymekkar (美H), iraimeh, -k (ラH)。「女性の感謝の仕草の一つ。右手の人差指を鼻と唇の間に当て軽く左から右へ動かす」(沙T)；《藻》戴く タイベアン。|| (4オ：200)

ラムイクシ ram'ikus 【動1】仕事ト人絶 || (< ram-i-kus 心・もの・～を通る) 立腹する※要検討；《参考》「ものが心を通る」ということで、「立腹する」という意味であらうか。類例としては、iramikushte [iramikuste] 「他人に腹をたたす、立腹さす」(Kb)；《藻》一。|| 「人絶」の部分の解読困難。(5オ：250)

ラムイシヤマ ramuisam 【動1】埒無(イヲカ) || (< ramu-isam 心・ない) 馬鹿である；《方言》「ばかな」ramuisam (八, 旭, 名H), ramuysam (沙, 帯, 美H)；《藻》埒もない ランホタラレ、ヲチカカラチケコ。☞ラムシヤク [ラムシヤク(?)]。|| (5オ：261)

ラムイヨツ ramueok(?) 【動2?】心思ふ || (< ramu-eok 心・に引っかかる) ～を思う※要検討；《参考》eok 「～に引っか

かる」(静Ok)；《藻》一。|| (3ウ：159)

ラムシヤ\ ramusaksak 【動1】埒無(イヲカ) || (< ramu-sak-sak 心・を持たない・重複) 愚かである；《参考》ramu-sak 「愚かな、馬鹿な心なき」(Kb), Ramusak 「Foolish. (愚かな)」(B), ramusak 「臆病な」(旭H)；《藻》埒もない ランホタラレ、ヲチカカラチケコ。☞ラムイシヤマ。|| (5オ：260)

ラヨツ ra(w)oci 【名】虹(ニツ) || 虹；《方言》方言差は音韻レベル：rawoci (美H), raoci (宗H), rayuci (八H), rayoci (幌, 沙, 帯, 旭, 名, ラH)；《藻》虹 ラヨチ。|| 天地之部。(1オ：14)

ランバシコロ rampaskor 【動1?】馴染 || 馴染む、仲が良い※要検討；《参考》Rambash-koro [rampaskor] 「To be on friendly terms with a person. (人と仲が良い)」(B)；《藻》馴染(ナジ)む ウコビキニ、ウエトモバウシ、ウコセシキニン、ウヲモイヌ。|| (4オ：196)

リコフ rikop 【名】星 || 星；《方言》「星」は方言差が目立つもののひとつで、rikop は美幌(H)にある。なお、nociw (八, 幌, 沙, 帯, 旭, 名H), noociw [老人語] (ラH), keta (宗, ラH) などという語形もある；《藻》星 ノチウ、リコツプ、ケダ。|| 天地之部。(1オ：5)

リセ rise 【動2】むしろ [むしろ?] || ～をむしろ；《参考》rise 「～をむしろ」(歳N；沙T) など；《藻》一。|| 「ろ」ではなく「る」か。(5オ：268)

リリキムニ ririkimun(?) 【名】鬼茎 || (< ririki-mun (?)・草) ※未詳；《藻》一。|| 衣食之部。(2ウ：100)

ルアンヘ ruanpe 【名】雨 || 雨；《方言》
ruanpe (美H), ruyanpe (帯, 旭, 名,
宗H)；《藻》雨 アプト、ルアンペ、ベ
ニ、ウエニ。☐アフト、ウエニ。|| 天地
之部。(1オ：9)

ルリコル rurkor 【動1】美味 || (<rur-kor
だし(?)・持つ) 甘い；《方言》『方言辞
典』の「甘い」の項目では topen が主
に採録されているが、帯広と美幌で
rurkor も採録されている；《藻》甘い
ルラ、ルラコル、ルラピリカ。|| 衣食
之部。(2オ：79)

レシユ resu 【動2】飼置 || ～を飼う。～を育
てる；《参考》resu 「～を育てる」(歳N),
「(一人)を育てる、(動物などの一匹/
一頭)を飼う」(沙T) など；《藻》育
(ハゴク)む レシカ。養育 レシカ。||
(5オ：269)

レフンカムイ repunkamuy 【名】鯨 ||
(<repun-kamuy 沖の・神) シャチ；
《参考》repunkamuy 「シャチ」(北海道、
樺太C動)；《藻》龍神 レフンカモイ。
|| 気形之部；「鯨」の旁(つくり)は
「虎」をあてている。(3オ：127)

レラ rera 【名】風 || 風；《方言》広く見られ
る語形：rera (北海道H), reera (ラH)；
《藻》風 レイラ。|| 天地之部。(1オ：6)

ワカセトク wakka setuku/(wakka hetuku
(?)) 【名+動1】泪下ル || (<wakka-
hetuku 水・出る) 涙がでる；《参考》
「セ」は日本語東北方言の影響により
/he/ を表している可能性がある。この
語形と全く同じものは確認できていない
が、rat etuk 「痰が出る」(美C人)に類
似の表現だろうか。地名に wakkaetuki
「山中の水の湧く穴」(美C地) というの

もあるようである；《藻》一。☐シキエウ
トカレウシ、シキヘヌ。|| 支脉之部。
(2オ：70)

ワタラ watara 【名】岩 || (海中の) 岩；《参
考》『地名小辞典』において、美幌と斜
里で watara が「海中の岩」として記
載されている。『沙流方言辞典』では雅
語や古語として「岩石」、『服部方言辞典』
では八雲で「石」の古語とされている。
北千島でも watara が「岩」と記載され
る(鳥居 1903, etc.)；《藻》岩 ワタラ。
|| 天地之部。(1オ：33)

エイホコ epoko 【動2】悪 || ～を憎む※要検
討；《参考》Epoko 「Waspish. Snappish.
Quarrelsome. (怒りっぽい、けんかっ
ぱやい)」(B), Hepoko 「To despise. To
abhor. (～を嫌悪する)」, epoko 「憎む」
(帯H), epokpa 「憎む」(八, 幌H)；《藻》
悪(ニク)む エシハ、ヘホコ。|| (5オ：
280)

エカウン eykaun 【動1】勝 || 勝つ。優勢で
ある；《参考》eykaun 「優勢である」
(歳N), 「他よりまさる、他より多い」
(沙T), eikaun 「勝つ」(八, 幌, 帯H),
eikaun(?) (名H) など；《藻》ふへる
イーカウン、イーカシユ。|| (5オ：270)

エカラスマクンベ ikaosma kun pe 【動2 +
助動+形名】無思掛 || (<i-ka-osma そ
れ・の上・にのる、kun べき、pe もの)
※未詳；《藻》一。|| 「思いがけず」だろ
うか。(4ウ：224)

エクウタシパ ikutaspa 【動1】御互 ||
(<iku-tas(a)-pa 飲酒・を交わす・複数)
酒を酌み交わす※要検討；《参考》
ikutaspa 「酒宴を行なう(複数形)」,
ikutasa 「酒宴を行う(単数形)」(歳N)

など；《藻》互に モイリ、ウタシバ。

|| (4オ：203)

エコイヲマレ ekoyomare 【動3?】酌行(シャクトリ) || (< e-ko-i-omare ~で・~に・ものを・入れる) ~で(人)にお酒を注ぐ；《参考》Ekoiomare [ekoyomare] 「To pour out ((~に~を) ついでやる)」(B), koyomare 「(人)にお酌する」(沙T)；《藻》-。 || (3ウ：132)

エコビ ekopi 【後副】■残多き事(立わかれ) || ~と別れて；《参考》ekopi 「~と別れて」(Ok)；《藻》人に離れ シイヨコビ、ウコホビ。☐シリヲビノブ。 || 「残多き事」の前部は欠損。(3ウ：133)

エコラムヌカル ikoramnukar 【動1】仕方見 || (< i-ko-ram-nukar 人・に対して・心・を見る) 人の仕方(力量)を見る；《参考》Ikoramnukara 「To tempt. (誘惑する)」(B), koramnukar 「~の度胸/力量を見る(試す)」(沙T), 「(主として男が女を)誘惑する」(沙Ky)；《藻》-。 || 「見」とははっきり読めないがアイヌ語から推測した。(5オ：272)

エコランバ ikorampa 【動2】咎 || (< i-ko-ramu-pa それ・に対して・を思う・複数) 咎める※要検討；《参考》Ikorampa 「To scold (~を叱る)」(B)に近い意味だとすると、やはり「咎める」であろうか。あるいは、ikoram 「~だと思う」(沙T)の複数形かもしれない；《藻》咎め ワコユルシカ。 || (4オ：184)

エトセフ etusep(?) 【?】訴人 || ※未詳；《藻》-。 ☐イヨヌシバ、イヨマフ、ウケウカンケ。 || (4ウ：237)

エヌチウエ [エヌシユエ] inusuye 【動1】招 || (< i-nusuye 人・に合図して招く) (合図して)招く；《参考》inusuye 「呼

ぶ、手招きする、手のひらを上へ向けて手招きをする」(沙Ky), 「ウインクする」(屈斜路C人), 「舟に乗って沖を通る者を何かの合図を以て招きよせることで、古謡の中で Karapto-kotan を通るとよく inusuye するとある」(幌C人)；《藻》-。 || 「残多き事」の前部は欠損。(5オ：266)

エヌヒタラ enupitara 【動2】甚閑人 || ~を好まない。~をじゃまに思う※要検討；《参考》Enupitara 「To eschew. To be tired of. Not to desire. To hate. (~を嫌う、など)」(B), enupitara 「~をじゃまに思う、うとんじる、早く帰ってほしいと思う」(沙Ky) など；《藻》-。 || 和語見出しの解読困難。じゃまに思ったり、早く帰ってほしいと思ったりすることに関連させるなら、「甚だ閑(ひま)な人」でもあり得るだろうか。(4ウ：225)

エ子アイノコル en=aynukor 【人接+動2】向ヲヨリ重ル || (< en= 私を(1人称単数目的格)、aynukor 敬う) ~が私を敬う；《方言》aynukor 「敬う、尊敬する」(八, 名, 沙, 帯, 美H), aynukoro 「敬う」(宗H)；《藻》重んず イトモコケアイヌ、アイノコル。☐イトモコケンアイノコル、イツアイノコル(1), (2)。 || (4オ：194)

エ子アंकシユ ene an kusu 【間投】成程 || (< ene-an-kusu このように・ある・故に)なるほど；《参考》ene-an-kusu 「なる程」(Kb)；《藻》それだから タプ子アंकシユ。 || (5ウ：288)

エ子カリー子ヤ ene kar h_i ne ya 【副詞+動2+形名+動2+終助】- || (< ene このように、karする、hiこと、neである、yaか) このようにすることか※

- 要検討；《参考》「イラムヘガマ、無心元 エ子カリイ子ヤ」で「難儀であって心もとなくこのようにすることか」くらいの意味であろうか；《藻》ケ様 エ子カル。☐イラムヘガマ、。|| 「一、家親類難儀にて不ニ居いたし立直るや／イラムヘガマ、無心元 エ子カリイ子ヤ」という一節にある。(3ウ:143)
- エパケ epake(?)【動2?】好||※未詳；《藻》好(ス)き コメブル(版木の問題で、「コヌブル」だった可能性がある)。|| (5オ:254)
- エミル imeru【名】電光。いなびかり；《方言》広く見られる語形：imeru(北海道, ラH)；《藻》光り ヘリアツ。|| 天地之部。(1オ:12)
- エヨレンカウシ iorenkaus(?)【動2?】浮心||※未詳；《藻》-。|| (4ウ:221)
- エラホカレ irapokkari【動1】負||負ける。劣っている；《参考》irapokkari「他人におとる」(歳N),「何の役にも立たない」(沙T), irapokkari(?)「負ける」(名H)など；《藻》-。|| (5オ:271)
- エラエバウシ eraypa(p)usi【名】防風||防風〔ハマベンケイソウ?〕※要検討；《参考》Eraiba-pushi〔eraypa-pusi〕「浜弁慶草(ハマベンケイソウ)」(B)という記録がある。防風は白い花であり、ベンケイソウは紫色の花を咲かせる；《藻》防風に似て ウライバウシ、ケンタポロ。|| 衣食之部。(2ウ:101)
- エレバシ erepasi【名】/【副】南||(< e-rep-asi 頭・沖・～に～を立てる)沖の方へ；《参考》南を「沖のほう」とすることかも、海側(太平洋)が南に位置するような地域の語形であると考えられる；《藻》午ヒガタ。|| 天地之部。(1オ:27)
- エンコタク en=kotak【人接+動3】寄付ク||(< en=私に(1人称単数目的格)、kotak 対して・～を取りに行く)私に～を請求する※要検討；《参考》kotak「～に…を請求する」(沙T)；《藻》近づく エンゴタツク。|| (3ウ:166)
- エンニシヤフカ en=nisapka【人接+動2】人をせかす||(< en=私を(1人称単数目的格)、nisap-ka 急である・使役接尾辞)～を急かす；《参考》nisapka「～を急にす、不意をつく」(沙T),「急がせる、早める、せかす」(沙Ky)。あるいは、enisapkaで「～に対して～を急かす」と考えるべきかもしれない；《藻》-。|| (3ウ:139)
- エンルヌカルクル wen-ru-nukar-kur(?)【動1+名+動2+形名?】貧弱||(< wen-ru-nukar-kur 悪い・道・を見る・人)※未詳；《藻》-。|| (4ウ:233)
- ウシテ uuste(?)【動2?】届||※要検討；《参考》uuste「～を全部残さず伝える」(沙T),「物語る」(Kb)；《藻》届(トボケ)るウシテ、イウシテ。|| (5ウ:295)
- ウシム osum【名】西||西；《方言》osumは『方言辞典』において名寄で見つかる。「東」のcupka(< cup-ka 日・の上)に対して、「西」をcuppok(< cup-pok 日・の下)(八, 幌, 沙, 美, 宗H)とする言い方もある；《藻》西 シム。☐ヲチツフ。|| 天地之部。(1オ:23)
- ウシラムナシレ osiramnasir(?)【名?】香奠||※未詳；《藻》香典 ウツベシノ。|| 「ナ」ははっきり見えない。(4オ:172)
- ヲタ ota【名】砂||砂；《方言》広く見られる語形：ota(北海道, ラH)；《藻》砂ヲタ。|| 天地之部。(1オ:32)
- ヲチツフ ocup【名】東||(< o-cup(?)・日)

東；《方言》cupka (ハ, 幌, 沙, 美, 宗H) と ocupka (名H) が類似の語形である。o- がついているのは名寄のみである。なお、「西」の語形は名寄と同一である；《藻》卵 メナシ。☞ヲシユム。
|| 天地之部。(1オ:19)

ヲナンタク onantak 【動1?】未不成 || 未だならざるところあり※要検討；《参考》eonantak「未だ成らざる所あり」(Kb)；《藻》一。|| (5オ:259)

ヲハシクカリ ohasi(r) ku=kari 【副+人接+動2】家さかす || (< ohasi(r)留守、ku=私が(1人称単数主格)、kari ~をまわる)留守の家を私はまわる※要検討；《藻》留守 ヲハシルシ。|| 「イヨ」は字消され、「ヨ」の右側に「ヲ」と書入れがある。(4オ:171)

ヲハシルイ ohasiruye 【動1?】留主 || 留守番する；《方言》「留守番する」ohasirun (沙 Ky ; 旭, 名H), oasirun (美H), siruwe (幌H), sirhuye (ハH), siruye (静Ok)；《藻》留守 ヲハシルシ。|| 「シ」は「レ」にも見える。(4オ:183)

ヲフトエ oputuye 【動2】■ ■ || ~を押す；《方言》「押す」putuye (ハ, 幌, 沙, 帯, 美, 旭H), opituye (名H), eaciw (宗H), okasura, okapituypa (ラH)；《藻》推す ヲプトイ。|| 和語見出しは欠損。(4ウ:209)

ヲヤムクテ oyamokte 【動2】当惑 || ~を変に思う；《参考》oyamokte は、「驚く(不思議に思う)、変な」(ハH), 「驚く(いぶかる)」(沙, 旭H), 「~を不審に思う」(歳N; 静Ok)。《藻》當惑 ヲヤモクテ。|| (3ウ:158)

ヲロンチリ woruncir 【名】羽白鴨 || (< wor-un-cir 水のなか・にいる・鳥)水鳥。

鴨の一種；《参考》woruncikap「水鳥」(沙T, 幌C動), 「かも(鴨)」(沙, 帯H)；《藻》つなき善知鳥 クイトツプ。|| 「羽が白い鴨」ということであろうか；気形之部。(3オ:118)

ヲワイメク oaymek(?) 【動2?】懼 || ~を恐れる※要検討；《参考》Oimek [oymek]「To fear. To be afraid. (～を恐れる)」(B)；《藻》怖(ヲソル)る ヲアイメク。|| 「おそれる」と読む。(5オ:281)

ヲン子キ onneke 【名】母 || 母；《参考》『方言辞典』にonnekeの記載はない。十勝(本別)にonnekeで「母親」という意味があると報告があり(澤井 2001, 2006)、加賀家文書でも「ヲン子ケ」が「母親」を表す(Kg蝦和)；《藻》母 ハボ。☞ハボ。|| 人倫之部。(1ウ:51)

ヲンルブシアシカエクル onrupus-askay-kur 【名】虺子男 || (< onrupus-askay-kur 狩りをする・上手である・人)狩りの上手な人。獵運のある人※要検討；《参考》知里真志保は、「オオカミ」について、onrupus-kamuy「狩りをする・神」と解している(美, クッチャロ, 釧, 白糠, フシコC動)；《藻》一。☞イソンクル。|| (4オ:188)

5. おわりに

本稿は、金沢家文書(No.89)のアイヌ語語彙集部分について資料紹介を試みたものである。ごく限られた情報のなかで雑駁とした紹介になってしまった部分があるのは否めないが、2節で述べたような上原熊次郎『藻汐草』との比較は、今後加賀家文書をはじめとする写本・類本等との関係性において新たな研究に繋がるものであると考えている。

なお今回、金沢家文書の画像掲載についてご快諾いただいた宮古市教育委員会市史編さん室、ならびに原本の所在に関する現状をお教え頂いた假屋雄一郎氏にはこの場を借りて感謝申し上げたい。また、北海道開拓記念館の東俊佑氏には、本稿4.3節の翻刻（特に和語見出しの読み方）に関して有益なコメントとご教示を頂いた。本稿でもって謝意を示せたかどうかはわからないが、これに終わることなく、その他の文献との比較・対照を通じて、金沢家文書のアイヌ語に関して自らの見解を出して行きたいと考えている。

参考文献

- 浅井亨（1972）「加賀屋文書の中のチャコルベ」『北方文化研究』6：131-162.
- 東俊佑（2012）「岩手県宮古市所在・金沢家文書の蝦夷地関係史料について」『北海道・東北史研究』8：75-87.
- 上原熊次郎（1792）『藻汐草』（影印：（1972）『成田修一撰 アイヌ語資料叢書 藻汐草』国書刊行会）.
- 奥田統己（1999）『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集（CD-ROMつき）』札幌学院大学.
- 加賀伝蔵（成立年不詳）『蝦夷方言 藻汐草 [写]』加賀家文書館所蔵（資料番号49）.
- 萱野茂（2002）『萱野茂のアイヌ語辞典』増補版. 三省堂.
- 狩野義美（2007）『新冠・静内地方のアイヌ語・郷土史話・随筆集：わが思い出』私家版.
- 久保寺逸彦（編）（1992）『アイヌ語・日本語辞典稿』北海道文化財保護協会.
- 澤井春美（2001）「アイヌ語十勝方言の親族名称について」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』7：21-50.
- （2006）『アイヌ語十勝方言の基礎語彙集：本別町・沢井トメノのアイヌ語』北海道立アイヌ民族文化研究センター.
- 田中聖子・佐々木利和（1985）「近世アイヌ語資料について：とくに『もしほ草』をめぐる」『松前藩と松前』24：17-32.
- 田村すず子（1996）『アイヌ語沙流方言辞典』草風館.
- 知里真志保（1956）『地名アイヌ語小辞典』北海道出版企画センター.
- （1975）『知里真志保著作集別巻Ⅱ：分類アイヌ語辞典人間編』平凡社。（初出：（1954）『分類アイヌ語辞典人間編』日本常民文化研究所。）
- （1976）『知里真志保著作集別巻Ⅰ：分類アイヌ語辞典植物編・動物編』平凡社。（初出：（1953）『分類アイヌ語辞典植物編』日本常民文化研究所，（1962）『分類アイヌ語辞典動物編』

日本常民文化研究所.)

鳥居龍蔵 (1903) 『千島アイヌ』 吉川弘文館.

中川裕 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』 草風館.

—— (1996) 「言語地理学によるアイヌ語の史的 연구」 『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』 2 : 1-17.

バチュラー、ジョン (1938) 『アイヌ・英・和辞典』 第4版. 岩波書店.

服部四郎 (編) (1964) 『アイヌ語方言辞典』 岩波書店.

服部四郎・知里真志保 (1960) 「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」 『民族学研究』 24/4 : 307-342. 日本文化人類学会.

深澤美香 (2014a) 「加賀家文書のアイヌ語資料と加賀伝蔵」 『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書274集 アイヌ語の文献学的研究』 1 : 21-48.

—— (2014b) 「加賀家文書における表記の特徴と傾向：ローマ字表記への試み」 『千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書274集 アイヌ語の文献学的研究』 1 : 49-72.

北海道教育庁社会教育部文化課 (編) (1982) 『アイヌ民俗文化財調査報告書』 1. 北海道教育委員会.

—— (編) (1986) 『アイヌ民俗文化財調査報告書』 5. 北海道教育委員会.

本田優子 (2013) 「象潟に伝存する『蝦夷方言藻汐草』について」 『雄波郷』 7 : 1-8. にかほ市教育委員会・にかほ市郷土史研究会.

宮古市教育委員会 (編) (2006) 『宮古市史 資料目録(1)』.

吉田 巖 (1989) 『北海道あいぬ方言語彙集成』 小学館.

Dybowski, B. (1892) Słownik narzecza Ainów, zamieszkujących wyspę Szumszu wlańcuch kurylskim przy Kamczatce. In. Radliński. *Rozprawy Akademii Umiejętności. Wydział Filologiczny. Serya II. Tom 1. Kraków.* (以下を引用：村山七郎 (編) (1971) 「Dybowski のシュムシュ島アイヌ語小辞典」 『北千島アイヌ語』 134-244. 吉川弘文館.) hñe

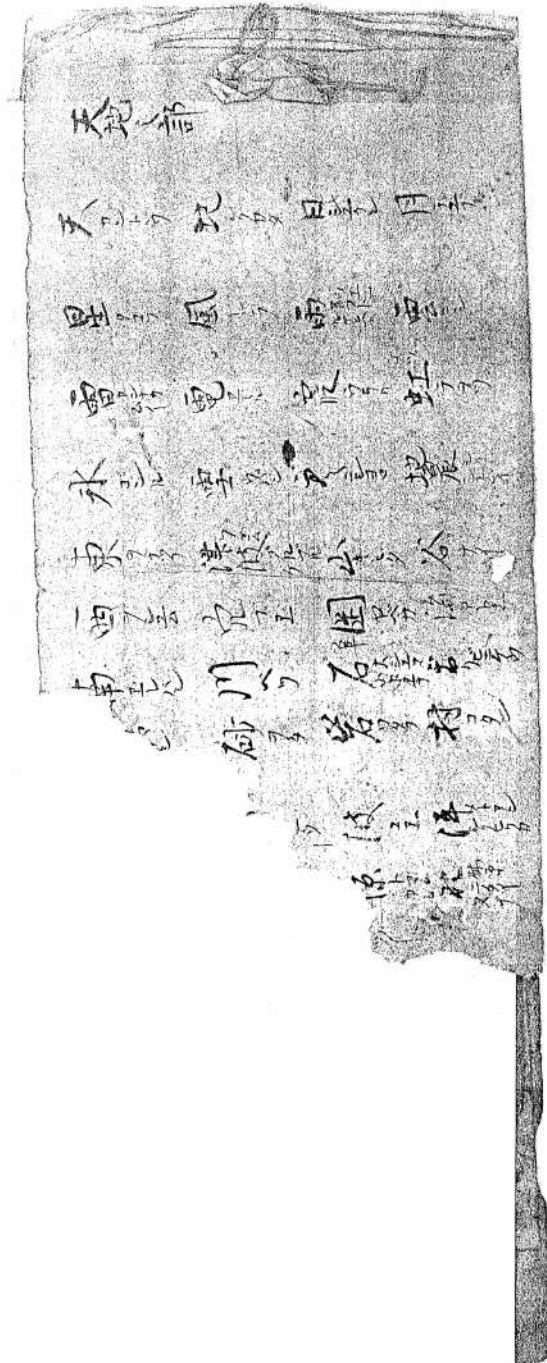
Fukazawa, Mika (2012) The distribution and interpretation of words for parents — 'mother' and 'father' in Ainu dialects. Papers from the first international conference on Asian geolinguistics. 89-98. Tokyo: Aoyama Gakuin University.

(<http://agsj.jimdo.com/>)

参考資料

金沢家文書「[アイヌ語彙集(付・シマコライヤ)]」(No.89)(1丁表~5丁裏)

一木



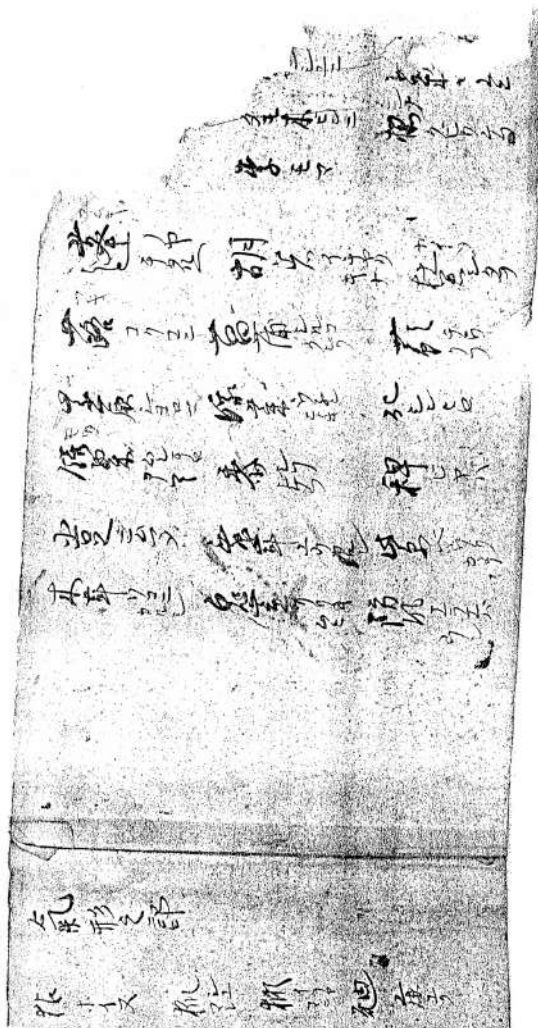
14

四月廿七日
 八月廿五日 十月廿五日 十一月廿五日
 泉 記
 人倫部
 之祖言父 母 弟 妹
 祖母 子 父 兄 弟 妹
 妹 伯母 父 弟 妹
 姨 弟 妹 弟 妹
 弟 妹 弟 妹
 弟 妹 弟 妹

2才

<p>アイヌ語</p>	
<p>アイヌ語</p>	<p>アイヌ語</p>
<p>アイヌ語</p>	<p>アイヌ語</p>
<p>アイヌ語</p>	<p>アイヌ語</p>
<p>アイヌ語</p>	<p>アイヌ語</p>
<p>アイヌ語</p>	<p>アイヌ語</p>
<p>アイヌ語</p>	
<p>アイヌ語</p>	<p>アイヌ語</p>

24



3才

気形部

依才支 狐 狂 椰 計 廻 座才

狼 雀 依 才 依 才 依 才

別 下 才 才 之 才 才 才 才 才

才 才 才 才 一 層 才 才 才 才

二 層 才 才 才 才 才 才 才 才

船 野 才 才 才 才 才 才 才 才

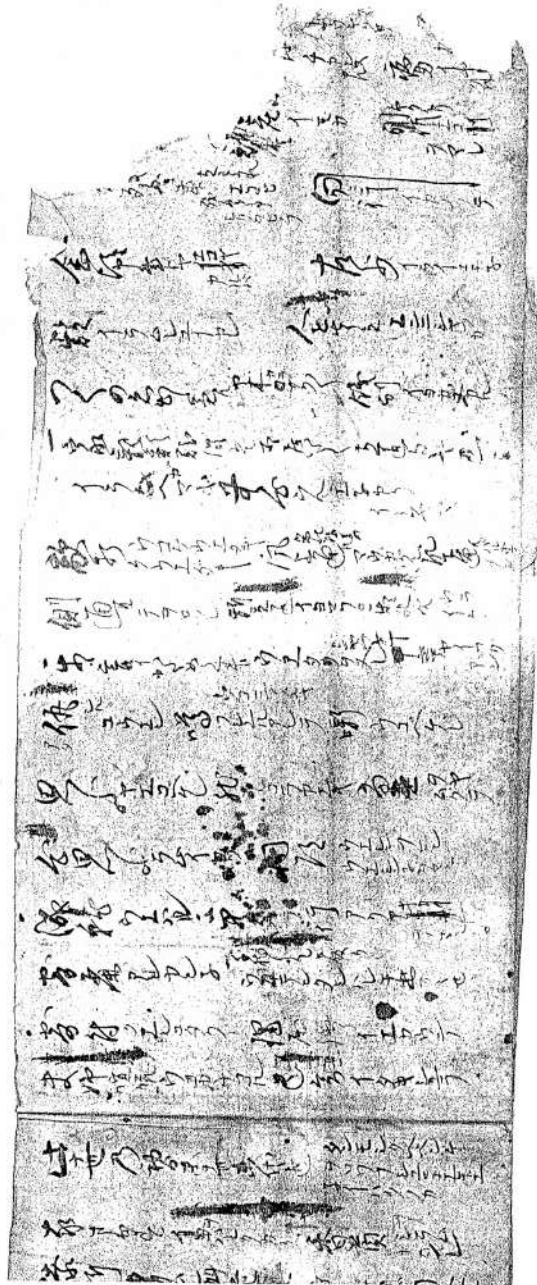
依 才 才 才

鏡 止 才 才 目 才 才 才 才

才 才 才 才 才 才 才 才

才 才 才 才 才 才 才 才

34



4才

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

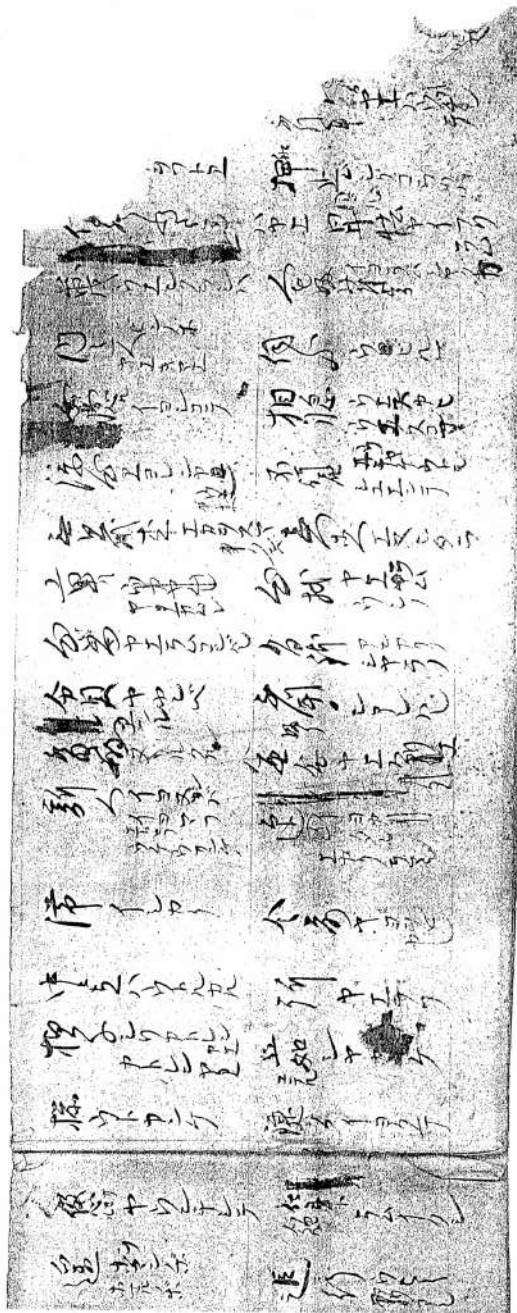
アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

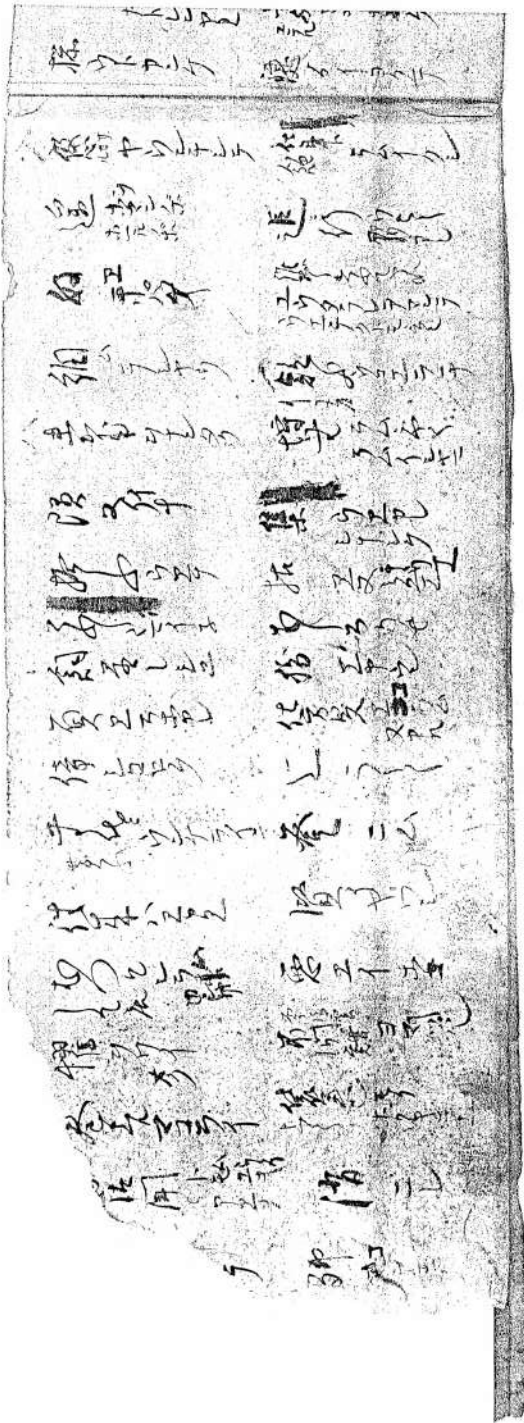
アイヌ語彙集の紙片（4才）

アイヌ語彙集の紙片（4才）

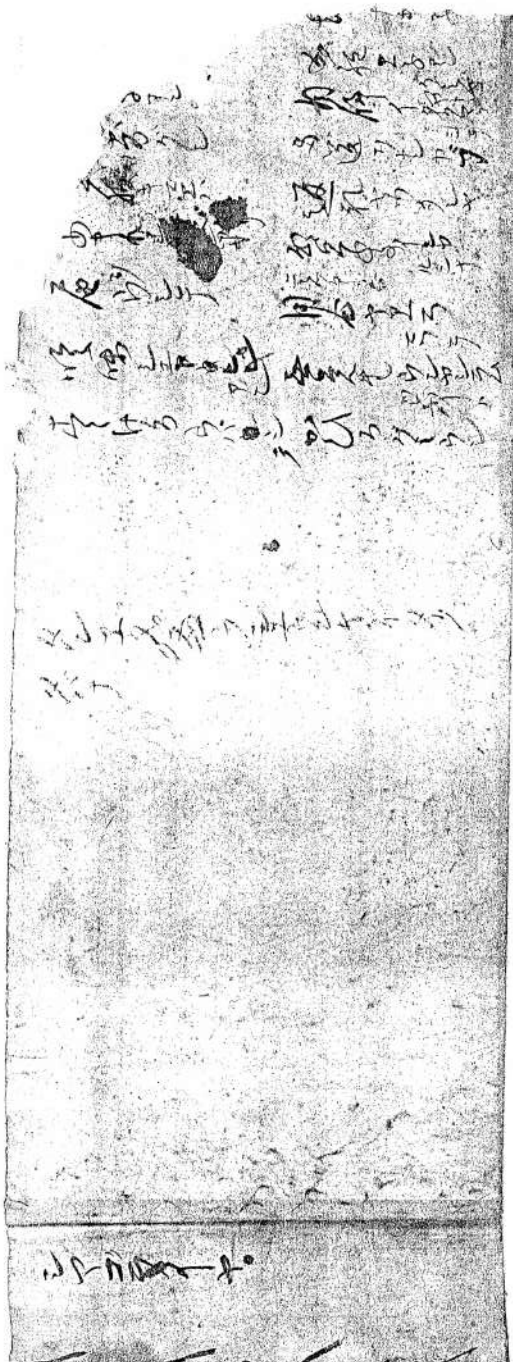
45



5才



54



Abstract:

Japanese-Ainu vocabulary list in the Kanazawa family's archives

FUKAZAWA Mika

Keywords: the Kanazawa family's archives, Moshiogusa, early modern Ainu, Nemuro

In this article, I will introduce the part of a book, the Japanese-Ainu vocabulary list probably in the nineteenth century. The book 16 pages long is included in the Kanazawa family's archives at Miyako, Iwate prefecture. It is split into two parts of the Japanese-Ainu vocabulary list and the Ainu text. In the 10 pages vocabulary list, there are 269 Japanese indexes (only legible). The beginning of the list is similar with UEHARA Kumajiro's "Moshiogusa," that is known as the first Japanese-Ainu dictionary. Therefore, in section 2, I examined the lexical relation between this book and "Moshiogusa."

In section 3, I discussed a few dialectal words when comparing the vocabulary list to "Moshiogusa." The writer of the list is unknown. However, in the Kanazawa family's archives, one of the writers KANAZAWA Kyuzo worked in Nemuro, the eastern Hokkaido prefecture. We can also find some character of the eastern dialects of Ainu in the vocabulary list.

Finally, in section 4, I provided a transcription of the vocabulary list and re-edited it in Japanese katakana order. Miyako city was devastated by the tsunami of 2011. Note that we could not see the original book, which the tsunami would wash away. Here, we used its copy and made a transcription of it.

Japanese-Ainu vocabulary list in the Kanazawa family's archives

FUKAZAWA Mika

Summary:

In this article, I will introduce part of a book, a Japanese-Ainu vocabulary list probably from the 19th century. The 16-page book is included in the Kanazawa family's archives in Miyako, Iwate Prefecture. The book is divided into two parts: the Japanese-Ainu vocabulary list and the Ainu text. In the 10-page vocabulary list, there are 269 Japanese entries (legible ones).

The beginning of the list is similar to Uehara Kumajiro's *Moshiogusa*, which is recognized as the first Japanese-Ainu dictionary. Therefore, in section 2, I examined the lexical relationship between this book and *Moshiogusa*.

In section 3, I discussed a few dialectal words by comparing the vocabulary list to *Moshiogusa*. The writer of the list is unknown. However, one of the writers in the Kanazawa family's archives, Kanazawa Kyuzo, worked in Nemuro, which is in the eastern part of Hokkaido Prefecture. In the vocabulary list, I found some characters from the eastern dialects of the Ainu.

Finally, in section 4, I provided a transcription of the vocabulary list and re-edited it as a list of Japanese *katakana*. Miyako City was devastated by the tsunami of 2011. Note that, although we could not see the original book because the tsunami swept it away, I used a copy and made the transcription from it.

Keywords: the Kanazawa family's archives, *Moshiogusa*, early modern Ainu, Nemuro